地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ

神戸市教育委員会
神戸市健康教育公社

1984

地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ

神戸市教育委員会
神戸市健康教育公社

1984

目　　次

開催にあたって
西区の遺跡
1．神出古窯址群 ……1
2．西神ニュータウン内の遺跡 ……5
第30号古墳 ……5
第31-3号古墳 ……5
第32-1．2号古墳 ……5
第33-1～5号古墳 ……6
第38号遺跡 ……7
第59号遺跡 ……9
第62号遺跡 ……10
3．居住・小山遺跡 ……12
4．玉津田中遺跡 ……14
5．居住遺跡 ……18
6．今津遺跡 ……20
7．新方遺跡 ……21
8．頭高山遺跡 ……24
9．柿谷古墳群 ……27
10．池上北遺跡 ……29
垂水区の遺跡
11．舞子古墳群西石ケ谷3～6号墳 ……32
長田区の遺跡
12．松野遺跡 ……36
13．神楽遺跡 ……39
中央区の遺跡
14．宇治川南遺跡 ……40
灘区の遺跡
15．滝ノ奥遺跡 ……43
東灘区の遺跡
16．史跡処女塚古墳 ……49
17．郡家遺跡 ……51
18．森北町遺跡 ……55
北区の遺跡
19．山田小学校内遺跡 ……56
20．オキダ古墳群 ……58
21．北神第10号遺跡 ……60
22．下宅原遺跡 ……61
あとがき

開催にあたって

神戸市内の埋蔵文化財調査は、１年間に25～30件にのぼります。それらの主だったものは、その都度現地説明会を催し、市民の方々に広く公開しています。また、昭和55年度には、過去10年間の調査成果を「地下にねむる神戸の歴史展」として、出土遺物の特別展示をしました。

それから４年を経過した今日、多くの遺跡が調査され、多大なる成果を納めてきました。ここにその一部ではありますが、再び市民の方々に御覧いただきたく、今回の特別展示を企画いたしました。

しかし、多くの遺跡を調査しているということは、とりもなおさずそれだけの遺跡が消滅しているということです。

今日まで長く保存されてきた遺構・遺物を、更に未来に向けて保存すべく努力することが、今の私たちに与えられた使命であると思われます。

今回の展示を通して、皆様方の埋蔵文化財に対する御理解が、より深まることを願ってやみません。

なお、最後になりましたが、玉津田中遺跡の出土品の展示については、兵庫県教育委員会の多大なる御協力を得ました。

昭和59年11月10日

神戸市教育委員会

教育長　山　本　治　郎

1. 神出古窯址群（昭和54～58年度）

所　在　地　　神戸市西区神出町北、東、南、田井
時　　代　　平安時代後期～鎌倉時代前期
種　　類　　窯址・集落址

位置・経過　　神出町一帯は印南台地と呼ばれる高位段丘上に位置しています。付近は東北端にある雌岡山と、それに連なる隆起扇状地からなり、小河川の侵蝕によってできた谷が西から東に入り込んでいます。

窯址は雌岡山南麓の緩やかな斜面や侵蝕谷の傾斜面を利用して築かれています。窯はあな窯で、３～８基が群在し、小支群を形成しています。

調査は、土地改良事業に伴って、昭和54年度より実施しています。当古窯址群は、平安時代後期（11世紀後半）から鎌倉時代（13世紀中頃）にかけて、須恵器、瓦を生産した瓦陶兼用の窯址群です。

現在までの調査では３～８基で構成された窯址群７支群と、その母体となったと考えられる集落址３ヶ所が発見されています。

遺　構　　当古窯址群の窯の構造の特徴は、周辺部の土を築山状に盛土して、その中央に窯体を築いていることです。このため、一般的な半地下式のあな窯とは異なり、窯の大部分が地上に露出していたと思われます。

また、この様な窯とは異なる小型の煙管直上式の窯址が３基発見されています。

集落址では掘立柱建物の一部と考えられる柱穴や溝、土壙などが発見されていますが、調査面積が限定されていたため十分にその内容が把えられていません。

遺　物　　当窯址の調査によって出土した遺物は整理用コンテナにして2000箱を超える厖大なものです。これらの内約８割が捏鉢や甕・埦等の須恵器で、残る２割程が瓦です。須恵器と瓦の比率は時代によって、大きく変化しており、12世紀の初め頃の各窯址では、かなり大量の瓦が焼かれています。

当窯址の主要な生産品は、11世紀の後半では埦・甕、12世紀の初頭では捏鉢・瓦、12世紀の後半には捏鉢と変化しています。

この他、硯や土堝、壺なども少量ですが発見されています。

ま　と　め　　現在までの調査で発見された窯址数は30基ですが、今後、詳細な調査を実施すれば、その数は100基を超えるものと思われます。

また、当窯址群で作られた須恵器や瓦は、西は九州、東は京都・滋

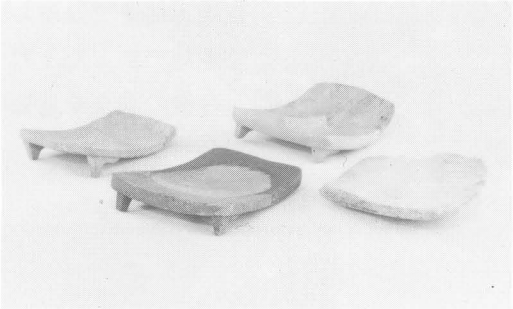
賀地方にまで分布しています。このことから当窯址群が当時の一大窯業地域であったと考えられます。

今後の調査や遺物の整理が進めば、さらに詳しい状況が知られると思われます。

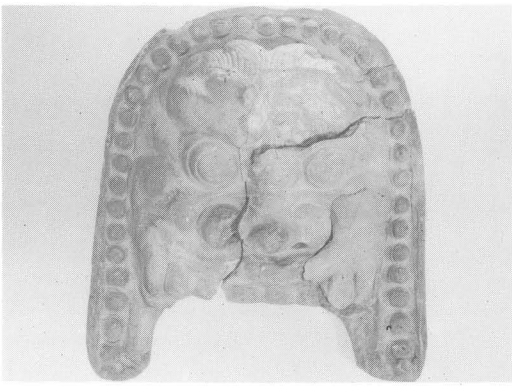
釜の口支群３号窯

釜の口支群５号窯

須恵器壺・鉢・埦・小皿

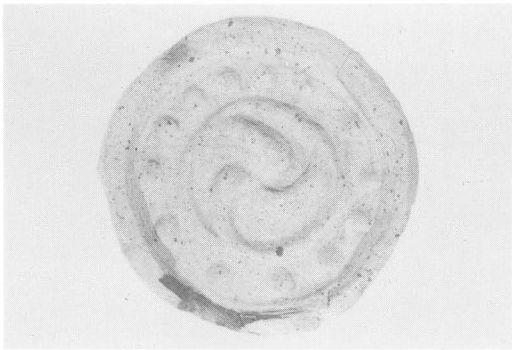


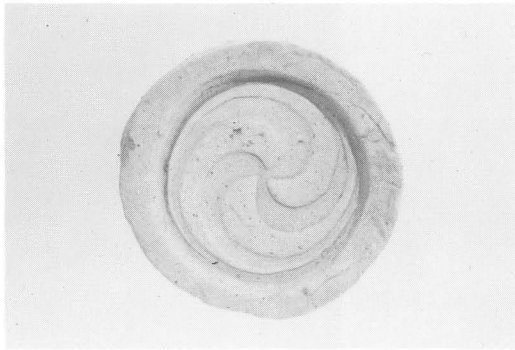
陶　硯



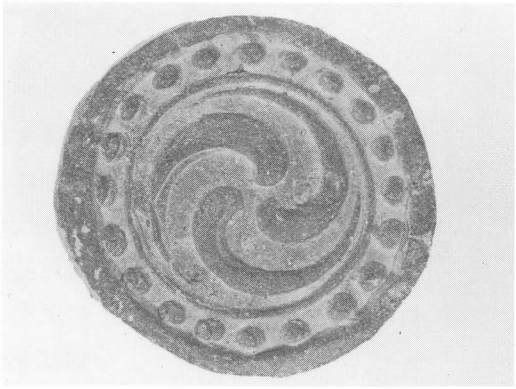
鬼　瓦

鬼　瓦

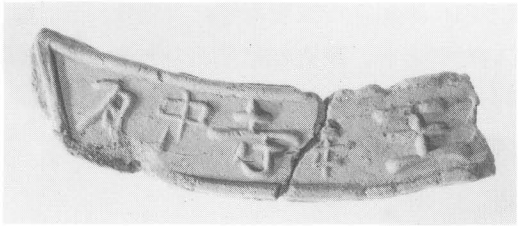


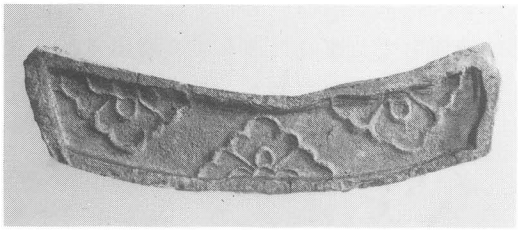


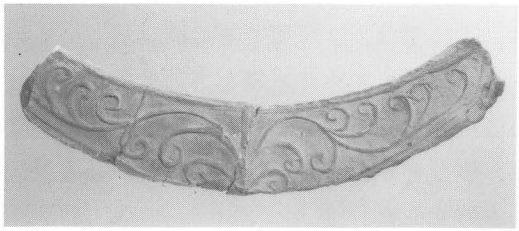
軒　丸　瓦



軒　丸　瓦







軒　平　瓦

2. 西神（せいしん）ニュータウン内の遺跡

西神ニュータウン内の遺跡は、その数が100近くあります。昭和44年度より発掘調査を始め、これまでに弥生時代の集落址、墓址、古墳時代前期から後期に至る数多くの古墳、奈良時代の火葬墓、平安時代の古窯址、鎌倉時代の火葬墓などが明らかになってきました。その調査成果は、明石川流域の原始、古代史を解明する上で大きく貢献をしています。その成果の一部は、調査概要や特別展の展示で公表してきましたが、今回はそれ以降の成果を中心に展示しています。

第30～33-5号墳

所在地　神戸市西区平野町堅田
時代　古墳時代
種類　古墳

第30号墳　平野部から少しはなれた、東西にのびる標高約110mの尾根にあります。墳丘は南西部が山道によって削られ、約½が失われていますが、径16m、高さ22mの円墳で、主体部には、割竹形木棺が納められていたと考えられます。

主体部の埋葬施設は、掘形内に木組みの室を設け、その中に粘土を敷いて割竹形木棺を納めていたことが、調査の結果わかりました。副葬品は、木棺の両横に鉄剣と束ねられた鉄鏃が納められていました。この古墳は、5世紀ごろに築かれたと考えられます。

第31—3号墳　第30号墳から西へ延びた尾根が、北と南西に別れるあたりの尾根西側斜面にあります。主体部は流失してしまったようで、検出されませんでしたが、古墳と尾根上方を画する周溝があり、ここから須恵器片が出土しました。

第32—1・2号墳　標高約100mの尾根頂部に、ならぶようにあります。両古墳とも墳丘はほとんど流失しており、主体部は、1号墳でその痕跡らしいものがみつかっただけでした。2号墳は、南東の尾根上方部分を切って周溝を設けており、径約10mの円墳であることがわかります。周溝のなかから、須恵器の有蓋高坏、壺などがみつかり、5世紀末から6世紀初めにつくられたことがわかりました。

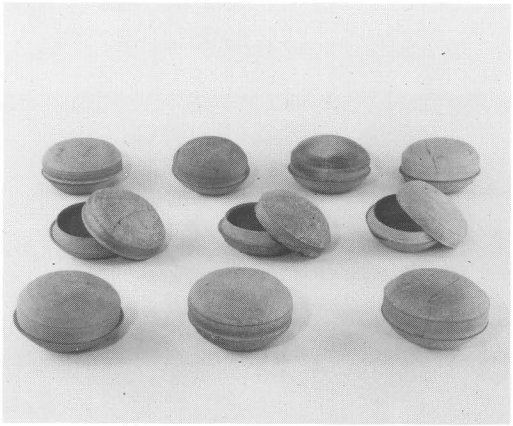
第33―１～５号墳

第32号墳から続いてきた尾根が北に谷を下っていくところに、６世紀はじめから中ごろにかけての古墳５基が、接するように築かれていました。

第33-１号墳は、このなかの中心に位置し、墳丘規模も径14ｍで最大です。主体部は箱形の木棺で、棺の東端に須恵器の一群が副葬されていました。

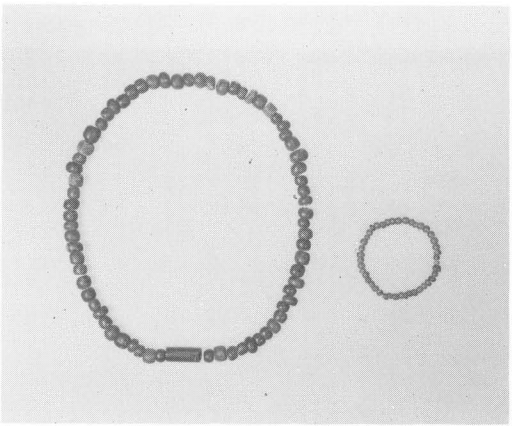
第33-２号墳は、主体部が盗掘で破壊されていましたが、墳丘の裾部に、30個の土器が置かれており、埋葬に伴う祭りの時に埋置されたと考えられます。この時期には、土器や鉄鏃が置かれていることが多く、このような儀礼が、一般に行われていたようです。

第33－1号墳出土須恵器坏



第33－2号墳出土須恵器坏

第33－3Ａ号墳出土須恵器坏



第33－5号墳出土ガラス玉

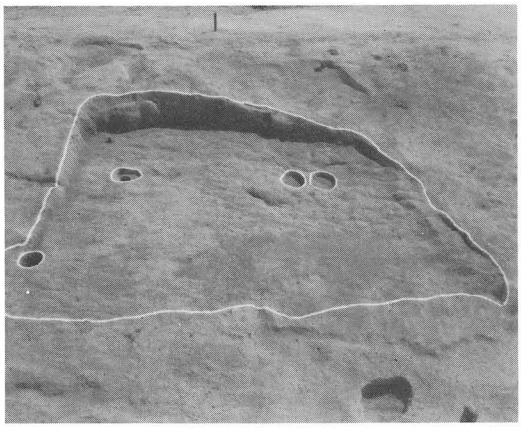
第38号遺跡

所　在　地　　神戸市西区平野町堅田
時　　代　　弥生時代～江戸時代
種　　類　　住居址、墓址、土壙、溝

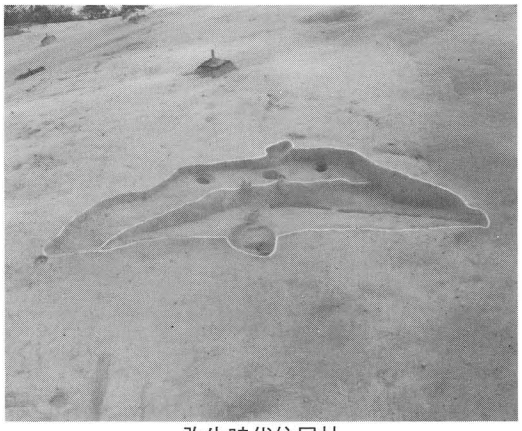
38号遺跡は、東南にのびる丘陵部先端付近の、標高およそ75～85m地点に立地します。昭和45～46年の第２次調査で、丘陵頂部付近が調査され、多数の弥生土器片が出土しました。

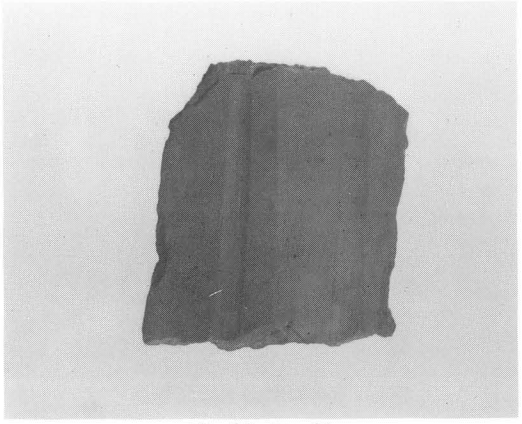
今回は、斜面の調査が行われ、弥生時代の住居址が３棟、古墳時代の墓址１基、鎌倉時代～江戸時代の土壙６、火葬址１、溝３本が発見されました。

弥生時代の住居址は斜面にあるため、全体の⅔以上は流失していますが、直径６～８m程度の円形住居址と考えられます。時期は、弥生時代の中頃です。


弥生時代住居址

弥生時代住居址

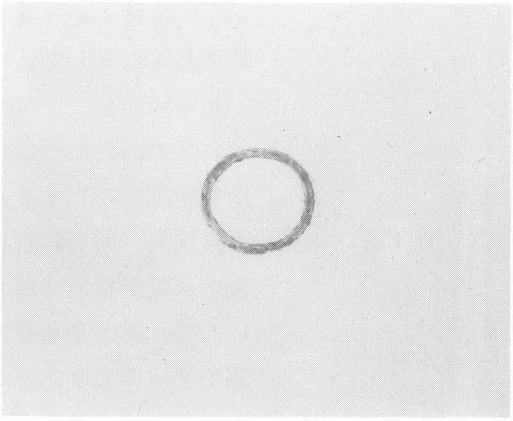

弥生時代住居址


磨製石剣

古墳時代の墓址は、長さ2.5m、幅0.6mの木棺墓で、内部には須恵器坏５、短頸壺２、高坏１、甕１、鉄鏃１、不明鉄製品１、銀製指輪１が、埋められていました。このうち、銀製指輪の出土は、神戸市内でも珍しく、注目されます。出土した土器から、古墳時代後期の中頃と推定されます。

鎌倉時代～江戸時代の土壙、溝からは、炭や銅銭が出土しましたが、その性格は、はっきりしません。

古墳時代木棺墓



銀 製 指 輪

須恵器壺、高坏、坏

第59号遺跡

所　在　地　　神戸市西区平野町

時　　代　　弥生時代

種　　類　　土壙墓、土壙群

位　置　　標高102m付近の丘陵頂に、遺構がひろがっています。平野部との比高は、約50mです。

遺　構　　木棺墓３基、土壙墓６基、不定形土壙８基を検出しました。土壙墓の内の１基は、長さ約５mの長大なもので、割竹形木棺が埋められていた可能性もあります。この掘り方の北端には、３個体の壺、甕が埋められていました。

他の木棺墓、土壙墓には、ほとんど土器がはいっていませんでした。これらの時代については、他の土壙出土の土器から考えて、弥生時代中期中葉に相当すると考えられます。

ま　と　め　　淡路島、明石海峡を望む、見はらしのよい丘陵頂部に、弥生時代中期の墓址が検出されました。これらを営んだ人々が、どこで生活していたのか興味ある点です。おそらく、眼下の明石川流域の平野部が集落であったろうと思われますが、丘陵上にも、弥生時代の集落がみつかっていますので、確定するのは難しい状況です。今後の周辺の調査を待ちたいと思います。

遺 跡 全 景

中期弥生土器

第62号遺跡

所　在　地　　神戸市西区櫨谷町菅野
時　　代　　弥生時代、古墳時代、平安～鎌倉時代
種　　類　　竪穴住居址、掘立柱建物、土壙

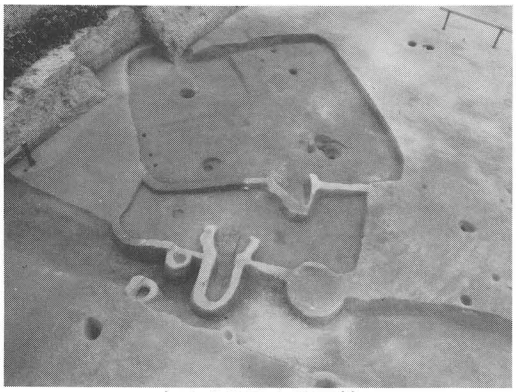
櫨谷川の中流域右岸に位置し、櫨谷川に注ぎ込む菅野谷川によってつくられた段丘上にあります。菅野谷川の改修工事に伴い、調査された遺跡です。

発掘調査の結果、弥生時代中～後期、古墳時代後期と平安時代後期から鎌倉時代にいたる複合遺跡であることがわかりました。これまでの調査で、弥生時代の竪穴住居址１棟、古墳時代の竪穴住居址３棟、掘立柱建物６棟、平安時代の掘立柱建物１棟のほか、多くの土壙、ピットや溝などがみつかっています。

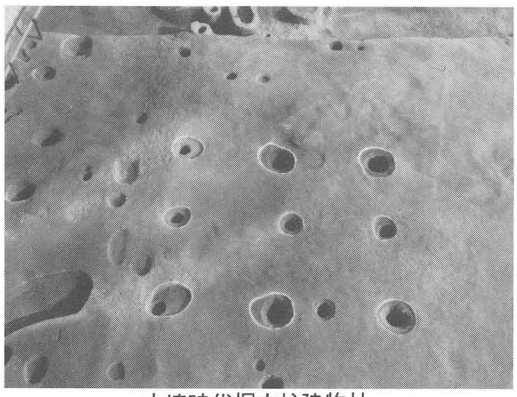
古墳時代の竪穴住居址３棟は、すべて６世紀代のものと考えられますが、それぞれ僅かに時期をちがえて建てられたことがわかりました。そして住居の構造も６世紀前半に属するものは、カマドが設けられていませんでしたが、６世紀中頃の住居には、カマドがつくられるようになったことがわかります。

櫨谷川流域では、これまで古墳時代の集落址の調査例は極めて少なく、その様相についても明らかでありませんでした。この遺跡の調査によって、この付近に大きな集落があったことが予想されます。また竪穴住居と共に掘立柱建物が多く存在していることも、この遺跡の特徴として注目されます。

遺跡全景

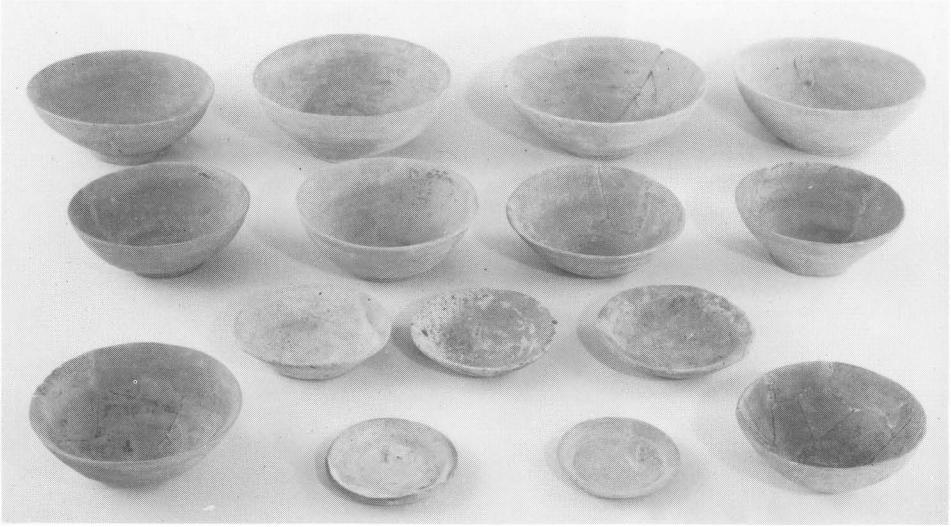


古墳時代竪穴住居址



古墳時代掘立柱建物址

古墳時代
土師器
須恵器



平安時代
土師器
須恵器

3. 居住（いすみ）・小山（こやま）遺跡（昭和58年度）

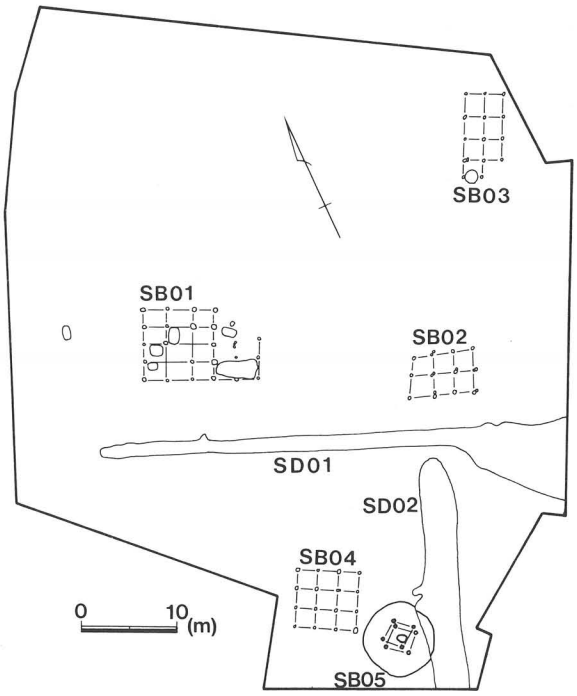
所在地　神戸市西区玉津町居住、小山
時代　弥生時代中期、古墳時代後期、平安時代～鎌倉時代
種類　竪穴住居址、掘立柱建物群、円墳、方墳、土器棺

経過　「居住、小山住宅街区整備事業」に伴い、昭和57年度に試掘調査を実施しました。その結果、２地区において、遺物、遺構が認められたため、昭和58年度に発掘調査を実施しました。

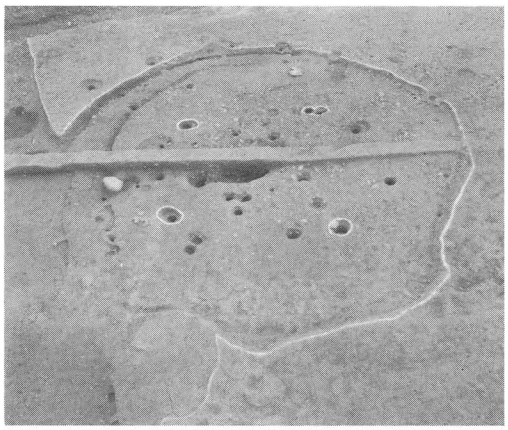
立地　明石川下流域東岸の標高34mの低位段丘上に立地しています。すぐ下の沖積地には、居住遺跡、玉津田中遺跡などがあり、玉津地域遺跡群の北端部を形成しています。

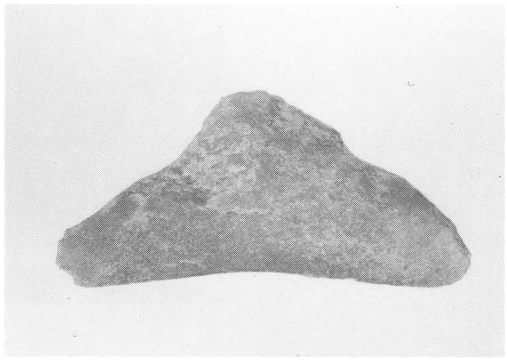
A地区　弥生時代中期後半の円形竪穴住居址１棟、土壙、ピット群が検出されました。土壙からは、大型、小型の磨製石庖丁が出土しています。

鎌倉時代に属する遺構としては、掘立柱建物４棟、土壙墓５基、土壙12基、多数のピットを検出しています。



A地区遺構配置図

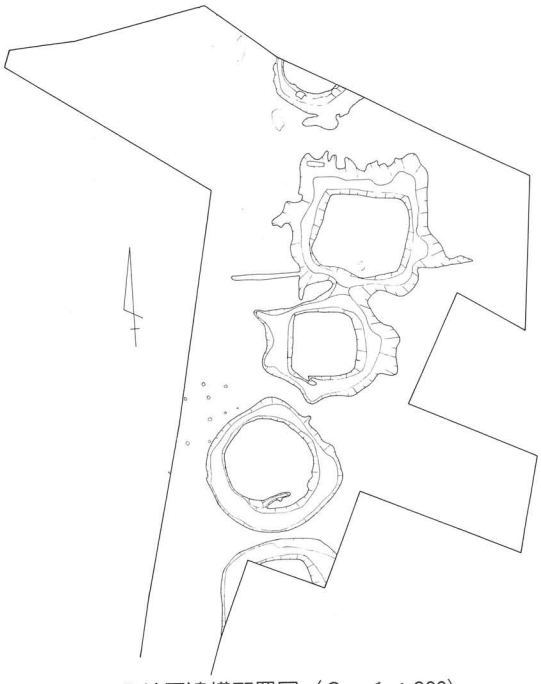




弥生時代住居址 ◀
大型石庖丁 ▶

B　地　区　　畑地の耕作土直下から、6世紀前半の円墳2基、方墳3基の周濠を検出しました。これらの墳丘（盛土）は、鎌倉時代頃に削平されたと思われ、埋葬施設は、木棺直葬であったと推定されます。

周濠の中から、須恵器・土師器がまとまって出土しています。



B地区遺構配置図（S＝1：800）

B 地 区 全 景

古墳時代須恵器

ま　と　め　　今回の調査によって、鎌倉時代の集落が、沖積地の玉津田中遺跡、居住遺跡だけでなく、台地の上にもひろがっていることがわかりました。B地区で検出された5基の古墳の痕跡は、東側丘陵の慶明寺古墳群の一支群と推定されます。慶明寺古墳群の広がり、総数は、今後の調査によって明らかになっていくと思われます。

周溝内須恵器出土状況

4. 玉津田中遺跡（昭和57・58・59年度）

所　在　地　　神戸市西区玉津町田中
時　　代　　弥生時代前期～古墳時代後期、鎌倉時代
種　　類　　集落址

経　過　　玉津田中遺跡は神戸市西区玉津町田中にあり、住宅・都市整備公団による総面積31ｈａの大規模な区画整理事業を計画されたことが、この遺跡を調査するきっかけになりました。

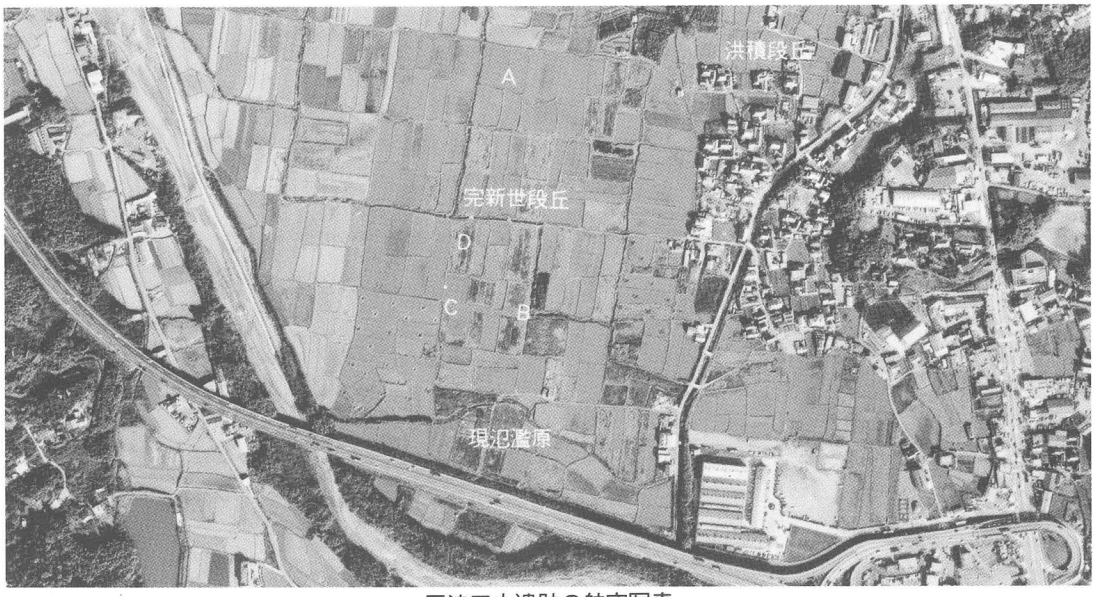
発掘調査は、昭和57年４月から始められ、現在も調査中であり、さらにあと数年を要する予定です。

立　地　　遺跡は明石川中流域の左岸にあり、その大部分は沖積平野で、一部洪積段丘をも含んでいます。

沖積平野の地下に埋れた遺跡を調査するときは、旧河道、自然堤防状微高地、後背湿地などの微地形を考慮しながら行う必要があります。それは人間の活動が地形の変化と密接な関係にあるからです。

現在、平坦にみえるこの遺跡においても、弥生時代にはかなり起伏にとんだ地形を形成していたことが、今回の調査で判ってきています。

調査範囲が広いため、まだ、全体を充分に把握できないところもありますが、いままで判ってきたことを航空写真で示した地点ごとに述べていきます。



玉津田中遺跡の航空写真

遺構
遺物

調査地域のなかで、自然堤防状微高地は４ヶ所ほどみとめられ、居住地と墓地に利用していることが確かめられています。

Ａ微高地は弥生時代前期の居住地です。ここからは竪穴住居跡、土壙、溝を検出しました。この微高地では、弥生前期の遺物しか出土せず、中期には居住地に適さない地形に変化したと考えられます。

Ｂ微高地は弥生時代中期の居住地です。掘立柱建物跡、土壙・壺棺などの遺構とともに、多くの土器、石器なども出土しています。

Ｃ地点からは弥生時代中期の水田跡を検出しました。この埋没水田は微高地から後背湿地へ移り変るところにあり、大きな畦（大畦畔）や小さな畦（小畦畔）によって区画されています。

水田跡と居住地の間には幅30数ｍの旧河道がありますが、同じ時代のものとしたのは、この両方の遺構面（当時の地表面）を覆っていた砂が一度の洪水によって堆積したからです。

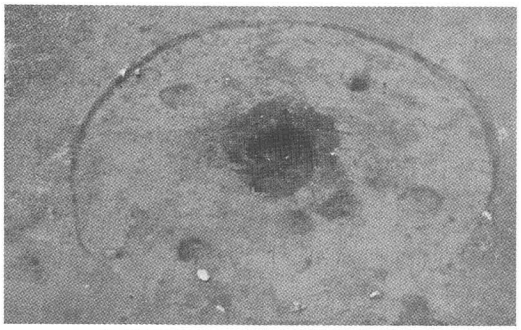
この水田の一筆の面積には大小があり、大きいもので150㎡前後、小さいもので35㎡前後になります。

Ｄ地点の微高地からは、弥生時代中期の周溝墓と呼ばれる四周に溝を配した墓を、８基ほど確認しています。一辺10ｍ前後の大きな方形周溝墓の回りに、周溝を共有した不定形な小さい周溝墓（２～４ｍ）を築いています。大きな方形周溝墓は、この集落の村長クラスとみることもできます。

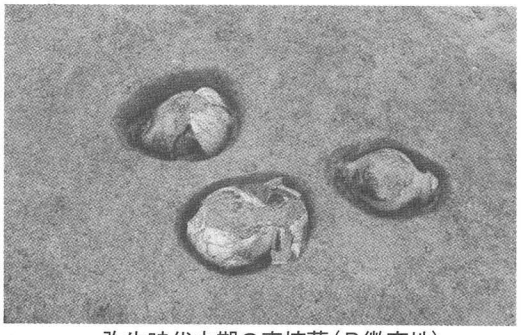
まとめ

このように弥生時代中期の居住地（住居跡）、生産跡（水田）、墓地（周溝墓）という村の構造を地形との関連で捉えられたことは、玉津田中遺跡の発掘調査の大きな成果のひとつといえます。

（この項は、兵庫県教育委員会「ひょうごの遺跡」３号より転載させていただきました。）

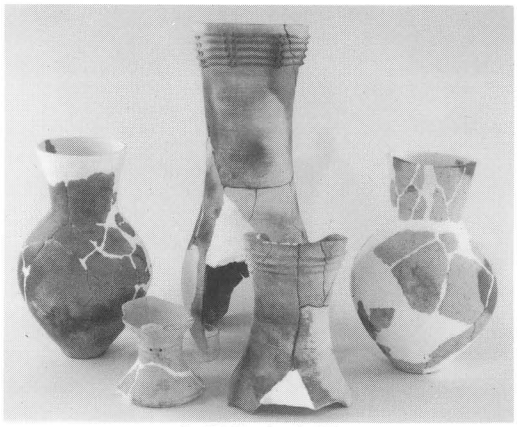


弥生時代前期の住居跡（Ａ微高地）

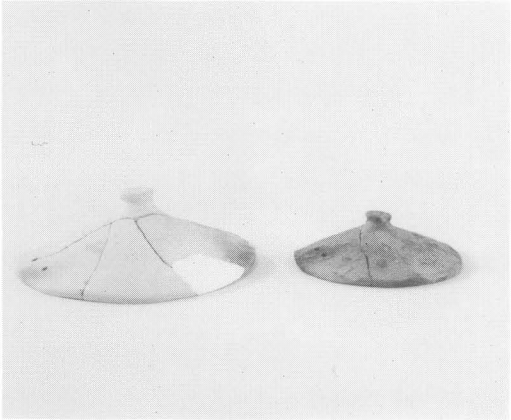


弥生時代中期の壺棺墓（Ｂ微高地）

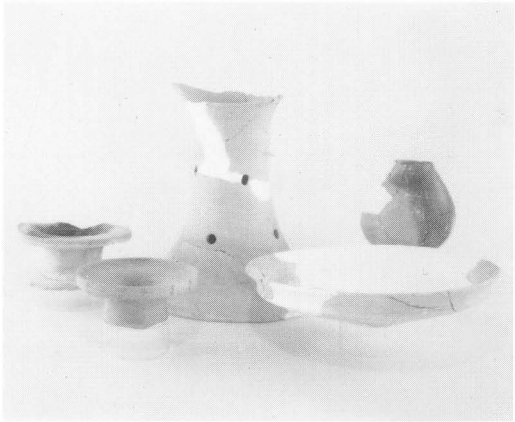
前期弥生土器



中期弥生土器



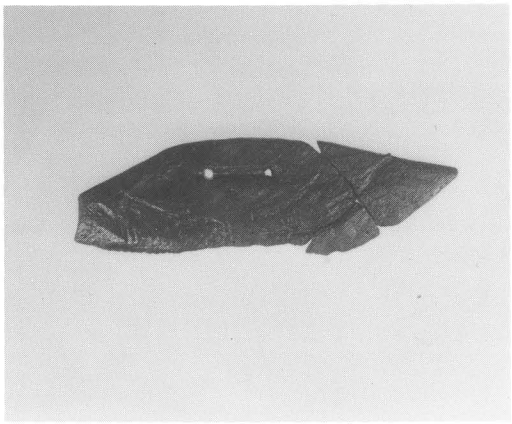
中期弥生土器



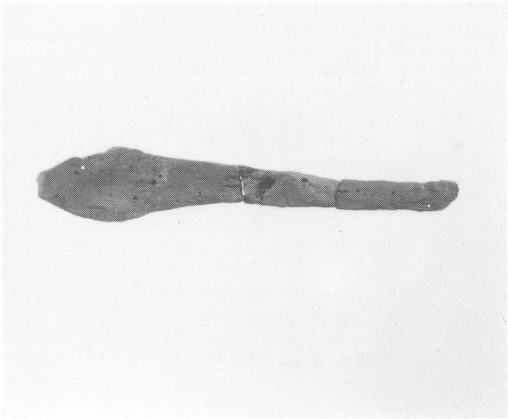
後期弥生土器

終末期弥生土器

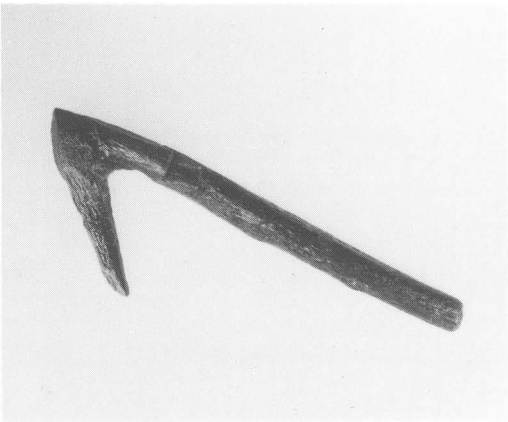
古墳時代中期・後期土師器・須恵器



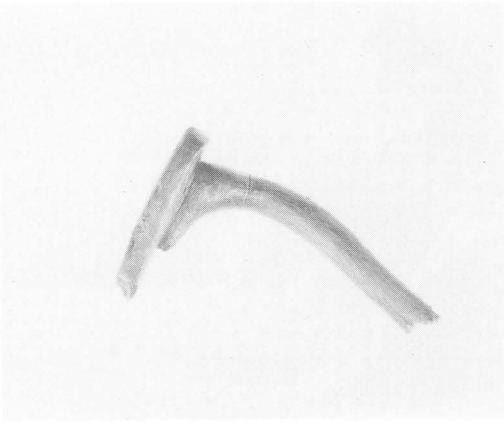
庖丁形木製品



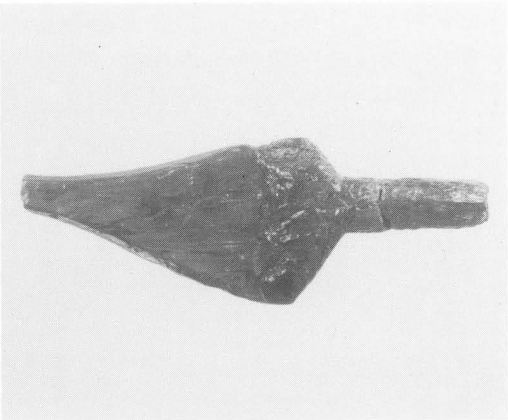
杓子未製品



斧　柄



斧　柄



鋤状未製品

石庖丁製品・未製品

5. 居住遺跡（昭和58年度）

所在地　神戸市西区玉津町居住字孫田
時代　弥生時代～鎌倉時代
種類　掘立柱建物、塀、溝、土壙

経過　当居住遺跡は、第二神明道路築造時に発掘調査が実施され、弥生時代前期およびそれ以降の遺物を出土することが知られました。その後、三度の発掘調査が行なわれ、また、昭和57年度から北に隣接する田中地区で兵庫県教育委員会が発掘調査を続行中であり、同様の時期の遺物、遺構の出土することが判明しつつあります。

立地　明石川下流域の東岸の標高15m前後の沖積地に立地しています。付近一帯は、明石郡条里と呼ばれる方形区画の地割が顕著にみられます。この地割が形成された時期については、いまだに詳らかにされていませんが、今日までの調査結果によると鎌倉時代を中心とする年代に築造されたと考えられています。

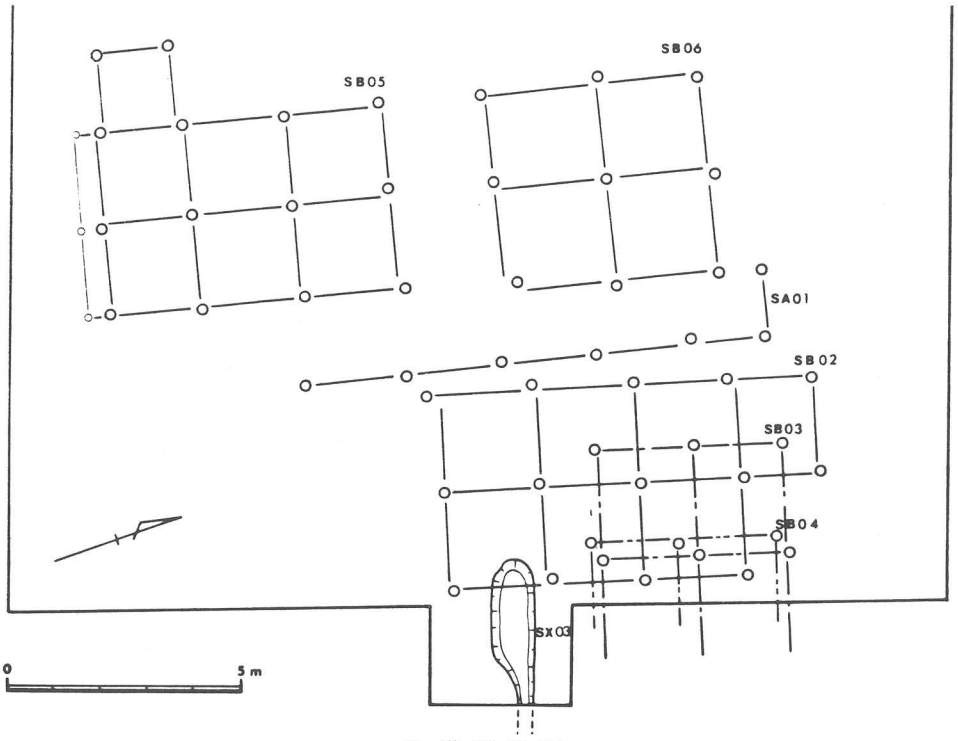
遺構　今回の発掘調査は、倉庫建築に伴うもので、建築物の基礎部分を中心にトレンチを設定しました。その結果、掘立柱建物址５棟、塀一列、土壙、溝などが確認されました。これらは、いずれも鎌倉時代前半（12世紀末～13世紀初頃）に築造されたものでした。

５棟の掘立柱建物は、桁行３間、梁行２間（6.4×4.2m）のものが２棟、桁行２間、梁行２間（4.7×4.2m）が１棟、２間×１間以上のものが２棟確認されました。これらは、いずれも総柱で、建物と建物の間は、目かくし塀で仕切られていました。

遺物　建物址が出土した付近を中心に、須恵器鉢、埦、小皿、土師器大皿、小皿、鍋、釜、瓦器埦のほか、中国からもたらされた磁器、九州で生産された滑石製の鍋などが出土しています。また、木製品では下駄、鉄製品ではノミ状のものが出土しています。

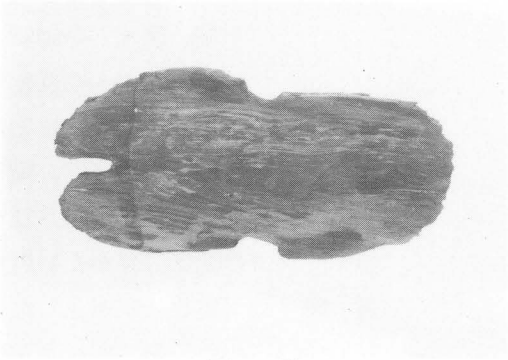
まとめ　当遺跡は、弥生時代前期以降の遺物を出土しますが、鎌倉時代の集落址が主体を占めると考えられ、その範囲は、北の玉津田中遺跡にまで及んでいます。他地域からもたらされた瓦器や磁器の量は、近傍でも稀な量で、ここに居住した人々が集落の中でも上位の階層にある人であろうことを想像させます。

弥生時代から古墳時代の遺物は出土するものの、遺構は明確でなく、最近徐々に明らかにされつつある玉津田中遺跡にその中心が求められると考えられます。

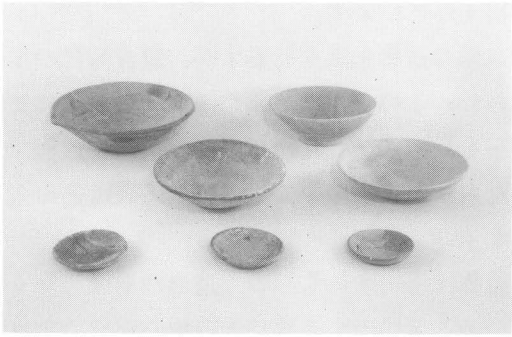


遺構配置図

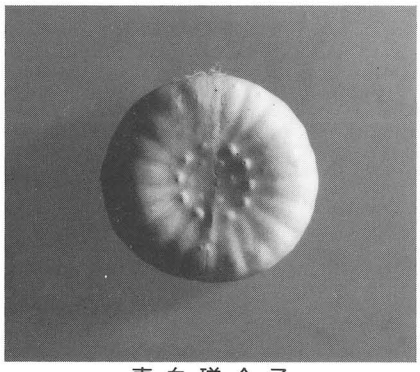
掘立柱建物址



下　駄



須恵器・土師器



青白磁合子

6. 今津（いまづ）遺跡（昭和57年度）

所在地　神戸市西区玉津町今津
時代　弥生時代・古墳時代
種類　竪穴住居址、溝、土壙墓

位置　明石川下流域左岸に位置し、現明石川までは約70mの近距離にあります。さらに下流の両岸には、吉田遺跡、吉田南遺跡、新方遺跡などの大集落が広がっています。

経過　分譲住宅建設に先立ち、昭和55、57年度に発掘調査を行いました。今回報告するのは、57年度調査の結果です。6×30mのトレンチを2本設定し、調査を行いました。

遺構、遺物　両トレンチの東端付近には、幅6m以上の大溝が南北方向に流れています。この大溝は、6世紀前半には埋っています。

第1トレンチからは、弥生時代中期後半の土壙2基、中期中葉の竪穴住居址1棟、木棺墓1基及び多量のピット、土壙を検出しました。

第2トレンチからは、弥生時代中期中葉の円形竪穴住居址1棟、土器棺1基、溝、焼土壙、ピット群を検出しました。この竪穴住居址からは、ガラス小玉、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧などが出土しています。

まとめ　今津弥生ムラは、弥生時代中期初頭に、新方遺跡等の影響を受けて成立し、弥生時代後期初頭に、一旦放棄されたようです。そして、古墳時代に入って灌漑用の大溝が穿たれています。ムラの大きさや規模については、今後の調査によって、徐々にその姿があらわれてくると思われます。

弥生時代住居址

弥生土器・古墳時代土師器

7. 新方（しんぽう）遺跡（昭和57年度）

所在地　神戸市西区玉津町高津橋字丁の坪（丁の坪地点）
伊川谷町潤和字大日（大日地点）

時代　弥生時代中期～鎌倉時代

種類　住居址・墓址他

経過　当新方遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う分布調査によって、その存在が確認された遺跡です。昭和45年度工事に先だち実施された発掘調査では、弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し注目されました。

その後、数回の小規模な発掘調査が実施され、昭和52年度には弥生時代前期中葉の土器や平安時代の斎串が、昭和55年度には中期中頃の貼石を有する円形周溝墓が発見されています。

今回、ここに掲載する大日地点および丁の坪地点は昭和57年度に実施したもので、いずれも小規模な発掘調査でしたが、多大な成果をもたらしました。

位置　明石川とその支流伊川の合流点から北東約1.2km付近を中心に東西約1.5km、南北約1kmの範囲に広がる弥生時代～鎌倉時代の遺跡です。周辺は標高8mから10mの沖積平野で、遺構・遺物は地表下1mから3m位の深さの所に埋没しています。

大日地点　遺構遺物　大日地点では地表下約60～250cmの間で4時期の遺構面を検出しました。

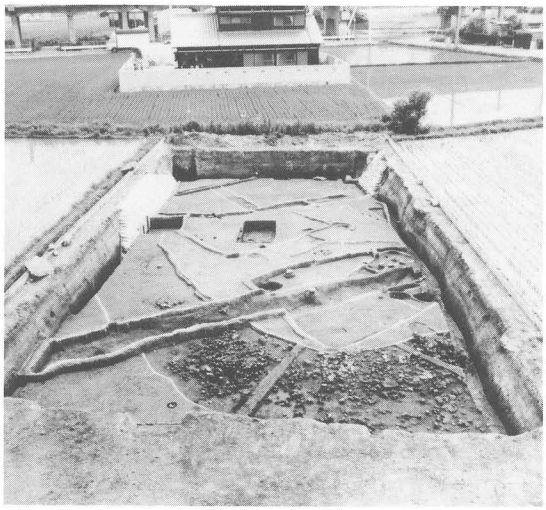
第1遺構面には鎌倉時代の掘立柱建物址5棟、溝1条、土壙1基が存在していました。遺物は柱穴・土壙などから白磁碗、須恵器埦、土師器皿などの他、下駄が出土しています。

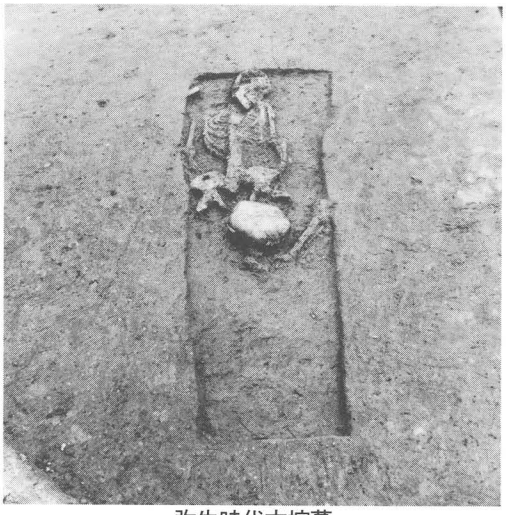
第2遺構面は古墳時代末期～奈良時代のもので、水田の畦畔状の高まりが存在しました。

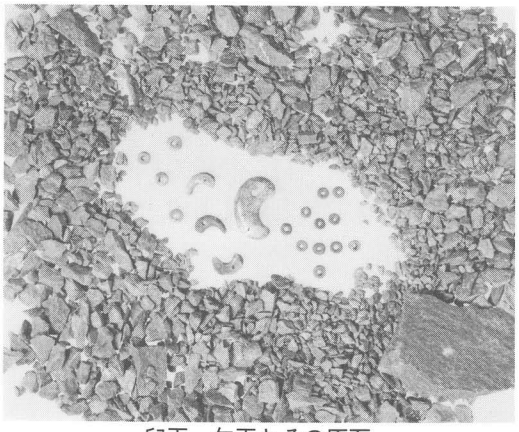
第3遺構面は古墳時代後期のもので、方形の竪穴住居址4棟と溝4条が存在しました。竪穴住居址の内、1棟からは須恵器・土師器とともに多量の玉類とその未製品・剝片などが出土しており、玉造工房址と思われます。発見された玉類は勾玉・管玉・臼玉の三種類で、原石も碧玉・緑色凝灰岩・滑石の三種類のものが使用されています。これらの玉類は同時に出土した土器からも5世紀末頃のものと思われます。

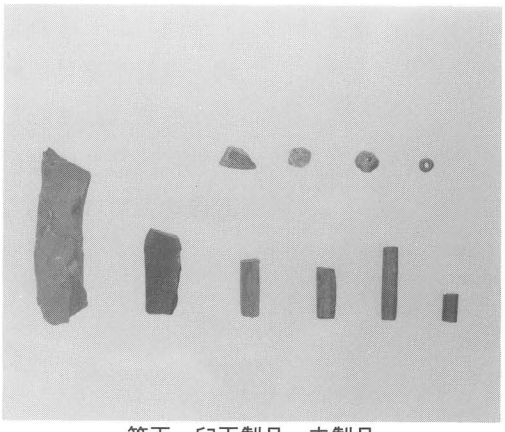
第4遺構面は弥生時代中期のもので溝3条・木棺墓1基・竪穴住居址1棟が存在しました。

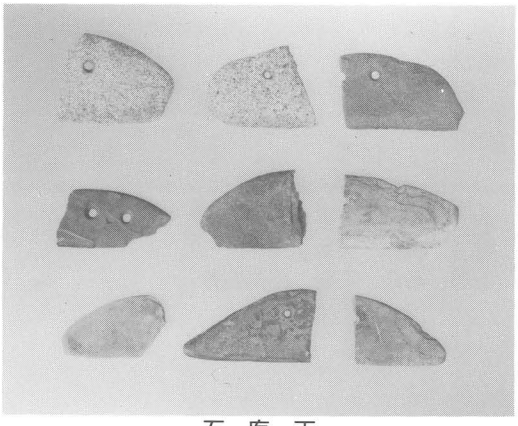
木棺墓の棺材は朽ち果て、痕跡を残す程度でしたが、棺内には人骨が比較的、良好な状態で遺存していました。


遺 跡 全 景


弥生時代木棺墓


臼玉、勾玉とその原石


管玉、臼玉製品・未製品


石 庖 丁

環 状 石 斧

丁の坪地点　遺構
遺物

丁の坪地点では地表下1.1～2.0mの間に5時期の遺構面が存在しました。

第1遺構面は古墳時代後期（6世紀後半）のもので細い溝などが数条存在しただけで、遺物の出土はわずかでした。

第2遺構面も古墳時代後期（6世紀前半）で、方形の竪穴住居址が1棟存在しました。住居址内から須恵器の坏などが出土しています。

第3遺構面は弥生時代後期のもので、方形と円形の竪穴住居址各1棟が存在しました。住居址内からは管玉の製品・未製品が出土しています。

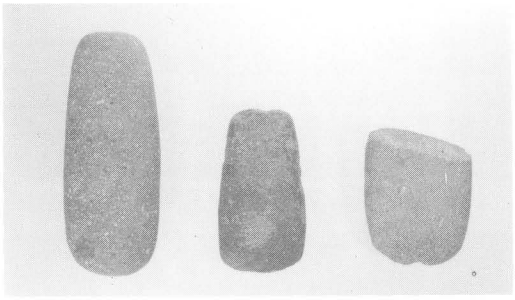
第4遺構面は弥生時代中期後半のもので、土壙が4基存在しました。土壙内からは、様々な紋様で飾られた土器が出土しています。

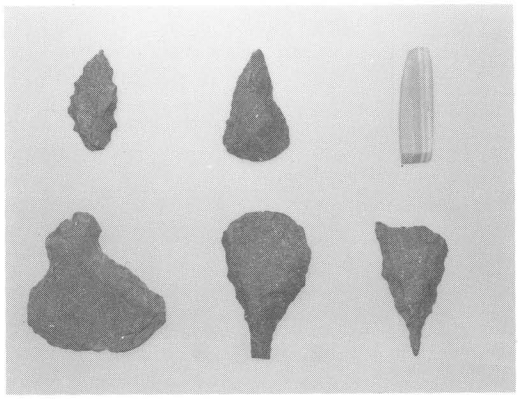
第5遺構面は弥生時代中期初頭のもので、円形の住居址が1棟存在しました。住居址内からは、先の後期の住居址内から出土した管玉と同様のものや玉磨きの砥石が出土しています。また、銅で作られた鏃や、和歌山県の紀伊地方で作られた土器が出土しています。

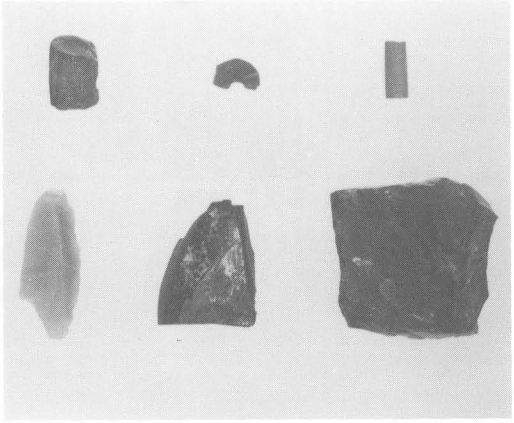
まとめ

今回の2ヶ所の発掘調査では、弥生時代から鎌倉時代の数多くの遺構・遺物が発見され、当遺跡の重要性をさらに認識する必要のあることが確認されました。

特に玉造りは弥生時代、古墳時代を通じて行なわれているようで、近畿地方では極めて稀なもので、貴重な発見といえます。







▶ 石　斧
▲ 管玉、製品、未製品
◀ 石鏃、石錐、石匙、小型石斧

8. 頭高山遺跡（昭和57・58年度）

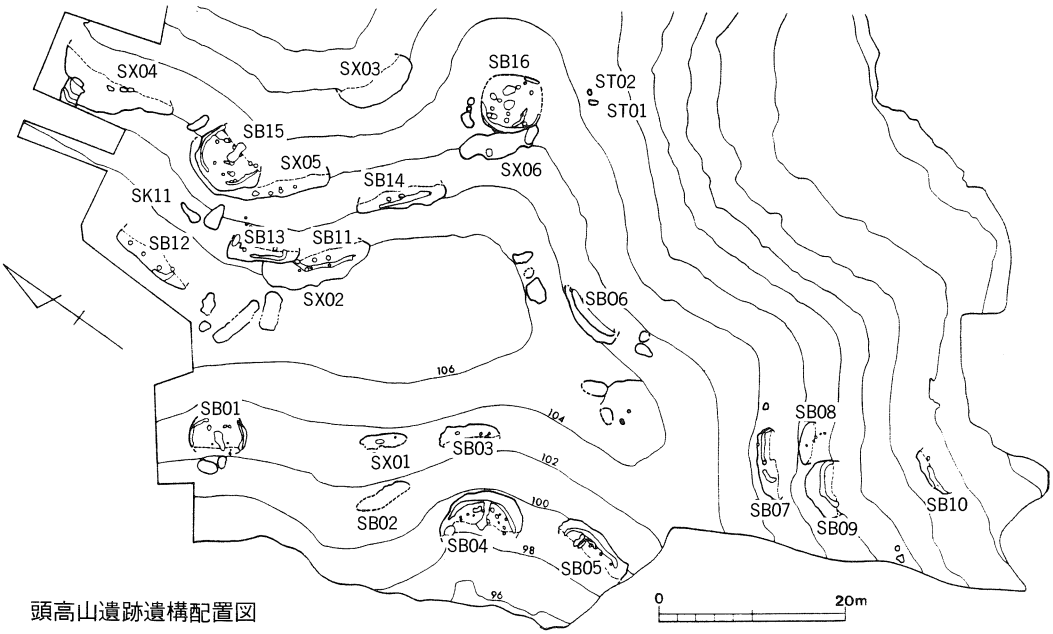
所　在　地　　神戸市西区伊川谷町小寺
時　　代　　弥生時代中期
種　　類　　集落址（住居址、土壙、墓址、段状遺構）

位　置　　明石川の支流である伊川の中流域左岸に位置し、伊川によって形成された平野部に臨む標高117mを頂部とする洪積丘陵上に立地しています。ここからは、南西に明石平野や遠くには瀬戸内海が望めます。

経　過　　昭和53年に実施した研究学園都市建設予定地内の遺跡確認調査によって弥生時代中期の集落址の存在が確認されました。遺跡は、頭高山の頂部とそこから派生する尾根上および斜面に存在し、標高90～115m、比高にして約40～50mにあります。このような弥生時代の集落址は、高地性集落とよばれています。

遺　構　　昭和57～58年度の調査は、遺跡の南東部分にあたる頂部から南へ派生する尾根について、約7000㎡を対象に行いました。

発掘調査の結果、竪穴住居址16棟、段状遺構６ヶ所、土器棺墓２基、土壙16基などの遺構が見つかりました。竪穴住居址は、斜面に営まれており、ほとんどは平面形が半月状を呈しています。このことから、住居は斜面下半部を盛土し、平坦面をつくり出して建築したものと推定しています。規模は長径６～８m、残存短径が４m程で、多くは楕円形であったと考えられます。

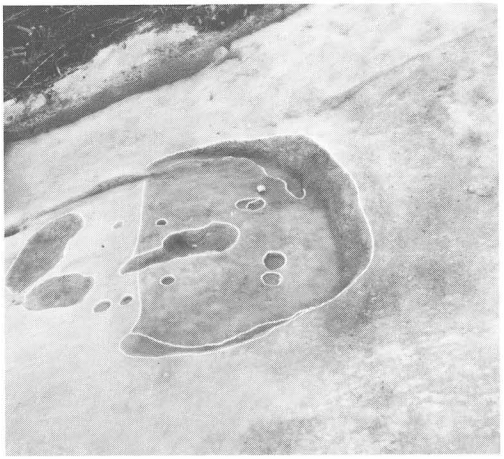


頭高山遺跡遺構配置図

遺　物　　遺物は、弥生土器、石器、鉄器が出土しました。土器は、弥生時代中期後半のものがほとんどです。石器類は、サヌカイト製の石鏃のほか、磨製石剣が出土しました。磨製石剣のうち１点は、茎部を欠損していますが、残存長15.5cm、幅3.2cmで基部付近に孔を２つ穿っています。

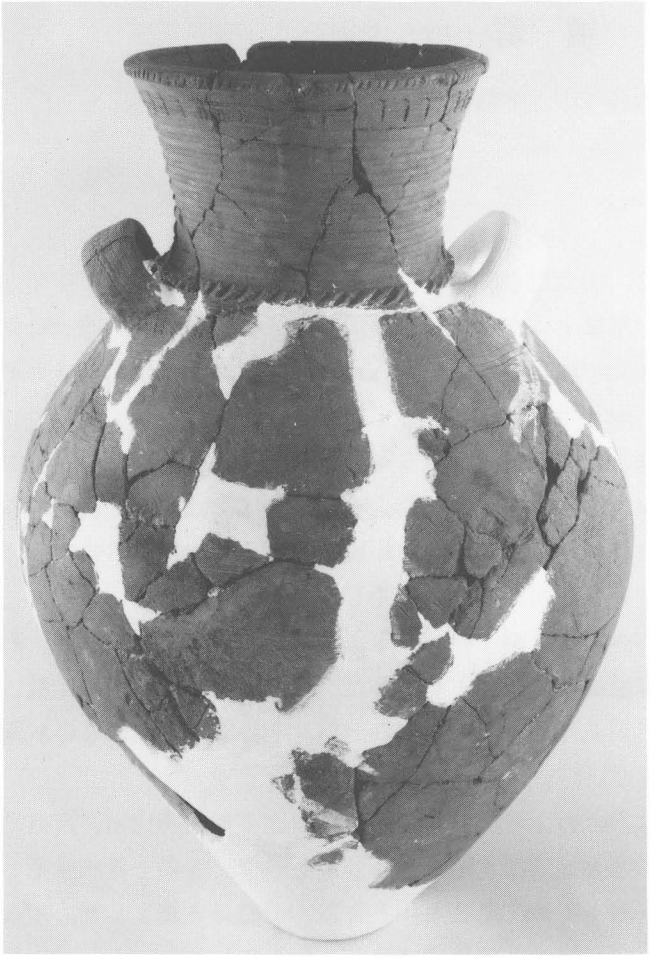
ま と め　　発掘調査を行ったのは、遺跡の一部分にすぎませんが、大規模な集落址であったと推察されます。頭高山遺跡のような弥生時代中期の高地性集落址は、瀬戸内海沿岸を中心に多くみられ、この時期に戦乱があったとも考えられています。

遺 跡 全 景

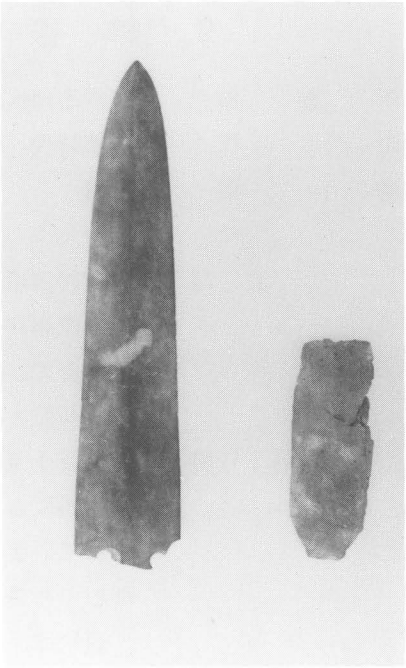


弥生時代住居址

弥生時代住居址

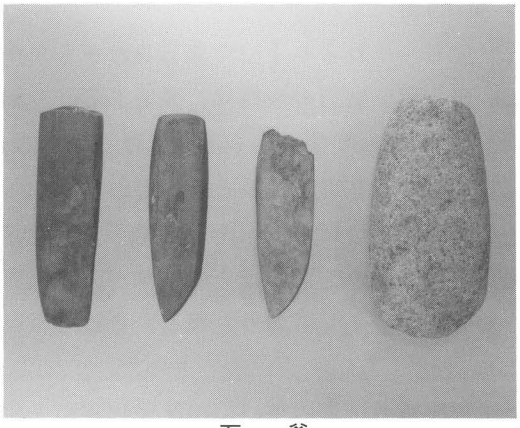


中期弥生土器

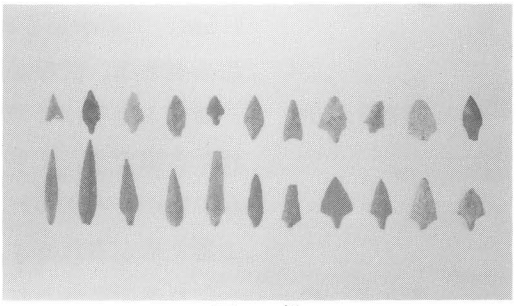


磨製石剣

サヌカイト



石　斧



石　鏃

9. 柿谷古墳群（昭和55年度）

所在地　神戸市西区伊川谷町小寺字柿谷
時代　古墳時代
種類　古墳

立地　柿谷古墳群は、明石川の支流である伊川を遡ること約8㎞、伊川左岸の標高70mの尾根上に存在する古墳群です。研究学園都市建設に伴う調査で、昭和55年になって発見された古墳群で、1号墳から3号墳の3基の古墳が同一尾根上に存在しています。

柿谷1号墳　柿谷1号墳は、直径14m、高さ3mの円墳です。埋葬施設は、主軸を東西にとる礫床に木棺を安置したもので、礫床には赤色顔料が塗布されていました。外部施設は、埴輪が墳丘中腹よりやや下位に、一重にめぐらされていました。葺石は存在しませんでした。

遺物は、棺内からは鉄剣1、刀子1が、墳丘からは、円筒埴輪、形象埴輪、朝顔形埴輪などが出土しました。形象埴輪には、盾形埴輪、動物形埴輪などがあります。出土遺物から、その築造時期は5世紀末頃と推定されます。

柿谷2号墳　柿谷2号墳は、柿谷1号墳の北西20mに位置する直径12m、高さ2mの円墳です。埋葬施設は木棺を直葬したもので、主軸を異にする2基の木棺（以下第1主体、第2主体とよぶ）が発見されました。墳丘上には、葺石、埴輪等の外部施設はありませんでした。

第1主体は、墳丘中央に設けられたもので、すでに削平を受けて、木棺の痕跡がわずかに残る程度で、掘形は検出されませんでした。木棺の規模は長さ1.5m以上、幅0.7mです。

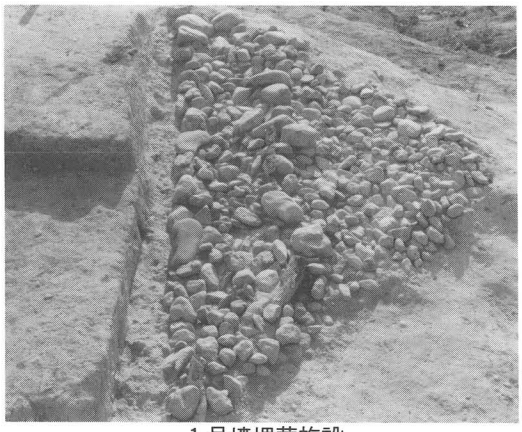
第2主体は、第1主体と直交し、それより下位で発見されましたが、西側半分はすでに流失していました。掘形の規模は、長さ1.8m、幅1.5m、木棺が長さ1.2m以上、幅0.8mです。出土遺物には、須恵器、碧玉製管玉、鉄鏃があり、築造時期は6世紀後葉と推定されます。

柿谷3号墳　柿谷1号墳、2号墳の存在する尾根を東へ50m上った地点で発見された古墳です。工事中に発見されたため、実態は不明ですが、木棺直葬の古墳と考えられます。須恵器が出土しており、築造時期は6世紀中葉と推定されます。

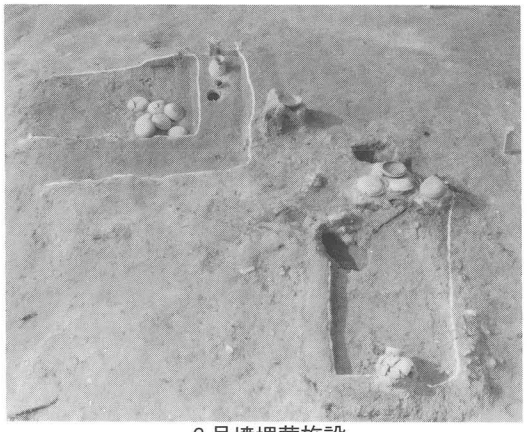
まとめ　これまでに知られていた伊川流域の後期古墳は、西区伊川谷町上脇付近まででしたが、柿谷古墳群の発見はそれを改め、伊川谷町小寺の地域まで開発が進んでいたことが明らかになりました。

1、2号墳遠景

1号墳埴輪列

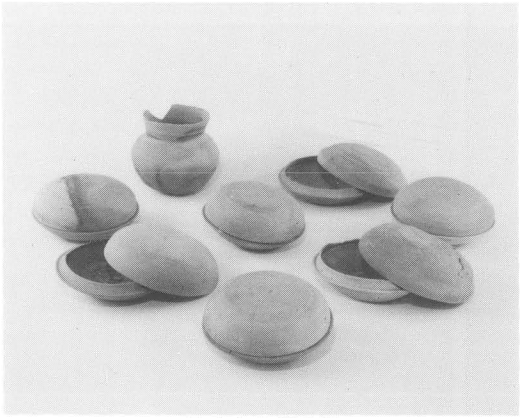


1号墳埋葬施設



2号墳埋葬施設

1号墳出土円筒埴輪



2号墳出土須恵器

10. 池上北遺跡（昭和55、56、58年度）

所　在　地　　神戸市西区伊川谷町上脇
時　　代　　弥生時代～鎌倉時代
種　　類　　住居址・墓址

位　置　　池上北遺跡は、伊川の中流域右岸の標高30m前後の低位段丘上に立地しています。

経　過　　この遺跡は、区画整理事業に伴い、昭和54年度に試掘調査を実施し、昭和55年度Ⅰ～Ⅲトレンチ、昭和56年度Ⅳ～Ⅵトレンチ、昭和58年度Ⅶトレンチの発掘調査を行いました。これらの調査で弥生時代の住居址、墓地をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての遺構、遺物が検出されました。

Ⅰトレンチ　　竪穴住居址３棟、土壙１基、ピット１、溝等が、検出されました。SB01は、方形で柱穴内より小形鉢型土器が出土しています。SB02は、SB01にきられ、復元直径8.5mの大型円形住居址です。北側には出入口と思われる突出部があり、床面には、粘土が貼られていました。ベッド状遺構や、直径約２mの土壙が存在しました。また床面より２点の器台や甕片が出土しています。SB03は隅丸方形で、住居を構成していた４ケ所の支柱や梁、桁、棰などが炭化した状態で検出されました。またSB02同様、ベッド状遺構をもつ住居址であることが判明しました。他に炭化材とともに高坏等が出土しています。出土遺物より３棟の住居址は、弥生時代後期のものと考えられます。

Ⅰトレンチ弥生時代住居址（SB03）

Ⅰ・Ⅴトレンチ出土弥生土器

Ⅱトレンチ　木棺墓５基と溝、ピット等の遺構が検出されました。溝は幅1.8m、深さ0.8mの規模をもち、その形状と埋土から、水路もしくは、生活圏の境界を意味するものではないかと考えられます。

Ⅲトレンチ　試掘時に中世の包含層が検出された所で、ピット、溝、土壙が検出されました。溝中より須恵器甕が人為的に破棄された状態で出土しています。甕の形態から鎌倉時代のものと考えられます。

Ⅳトレンチ　遺構面は、弥生時代の遺物を含む砂利層で履われていました。おそらく伊川の氾濫によるものと考えられます。検出された遺構は、自然流路、土壙４基、ピット等です。トレンチ北部では、住居址が削平された痕跡ではないかと考えられるものが、２ヶ所で検出されました。出土遺物は少量でしたが、弥生時代中期のものと考えられます。

Ⅴトレンチ　住居址１棟、土壙３基、落ち込み状遺構が検出されました。住居址は、円形で直径8.5mの規模をもっています。床面には、７ヶ所の柱穴と中央に径1.1mの土壙が存在し、周壁溝をもっています。床面から壺・甕・砥石等が出土しました。これらの遺物より弥生時代中期末と考えられます。

Ⅴトレンチ弥生時代住居址

Ⅵトレンチ　Ⅴトレンチと同様の弥生時代遺物包含層が存在しました。遺構は自然流路とピットを検出した程度で、土層の堆積状態から、Ⅴトレンチと同様の時期と考えられます。

Ⅶトレンチ　弥生時代後期の竪穴住居址２棟、壺棺墓１基のほか、弥生時代後期から古墳時代前期の溝、土壙などが見つかりました。

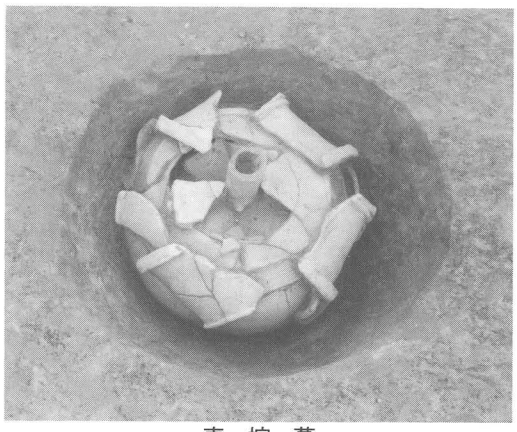
竪穴住居址は、直径7.5mの円形で、柱穴がほぼ正五角形にならぶ５本柱の構造のものと、直径が約10mと推定される大型の円形住居址の一部とが検出されました。住居址内から出土した土器には、山陽地方の特徴をもつものもあり、運ばれてきたものと考えられます。

墓址は、住居址に近接してつくられており、壺を棺として用いたもので、大きさから乳幼児のものと考えられます。この壺棺は、径45cm、深さ35cm以上の墓壙に直立して置かれ、口縁部を打ち欠いた壺に高坏の坏部を伏せて蓋をしていました。

検出された溝のうちの１条は、幅約２ｍ、深さ0.75ｍで、埋土の堆積状況から自然河道と考えられましたが、この溝から、弥生時代前期の壺形土器の口縁部や、古墳時代前期の土師器の甕、小型丸底壺など時代の幅をもった遺物が見つかりました。このことは、池上北遺跡が弥生時代前期から古墳時代前期の長い期間、連綿と生活が営まれていたことをを示しています。

ま と め　昭和54年度の試掘調査より４年度にわたり調査を行なってきました。その結果、遺跡の範囲は、東西約500ｍ、南北約250ｍ程度と推定でき、弥生時代前期～古墳時代にかけて営まれた集落址であり、伊川流域の中でも重要な位置を占めることが明らかになりました。

Ⅶトレンチ弥生時代住居址



壺　棺　墓

弥生土器、古墳時代土師器

壺　棺　墓

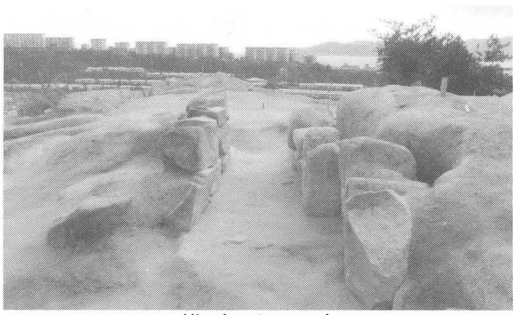
11.　舞子古墳群西石ケ谷3·4·5·6号墳（昭和55、56年度）

所　在　地	神戸市垂水区舞子坂２丁目
時　　代	古墳時代
種　　類	古墳

経過・立地　舞子古墳群は、舞子丘陵上に点在する総数60基をこす古墳群です。舞子古墳群の本格的な調査が実施されたのは、昭和39年以降で、今回紹介する西石ケ谷３、４、５、６号墳は、昭和55・56年に調査した古墳です。西石ケ谷の尾根上には６基以上の古墳があり、尾根の上方から１号～６号の順で点在しています。この尾根上に存在する古墳を舞子古墳群西石ケ谷支群とよんでいます。

西石ケ谷３号墳　西石ケ谷３号墳は、西石ケ谷の尾根の中程に位置する直径12mの円墳で、右片袖の横穴式石室を埋葬施設にしています。石室は、玄室左側半分と奥壁が失われていました。羨道内から、石室外へ断面がＶ字形の排水溝がのびていました。羨道内埋葬がみられ、被葬者は３体と考えられます。出土遺物には、土師器・須恵器、刀・刀子、鉄鏃、釘、馬具、金環、石鏃などがみられ、築造時期は、６世紀後半と考えられます。

３号墳遠景

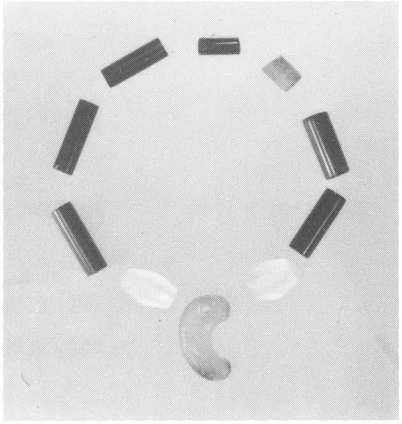

横穴式石室

羨道部木棺痕跡

石室内遺物出土状況

西石ケ谷4号墳　　西石ケ谷3号墳の南30mの尾根の突端に位置する直径13m、高さ2.5mの円墳で、埋葬施設は右片袖の横穴式石室です。石室には、玄室2体、羨道1体の計3体の埋葬が行われていました。出土遺物には、土師器・須恵器、鉄鏃、刀子、釘、馬具、金環、ガラス玉、勾玉、管玉、切子玉、紡錘車、石鏃などがみられました。4号墳の石室内には、玄室の両側壁に沿って3対のピットが掘りこまれており、このピットが石室構築時の足場の痕跡ではないかと推定されています。4号墳の築造時期は、6世紀中葉と考えられます。

4号墳全景

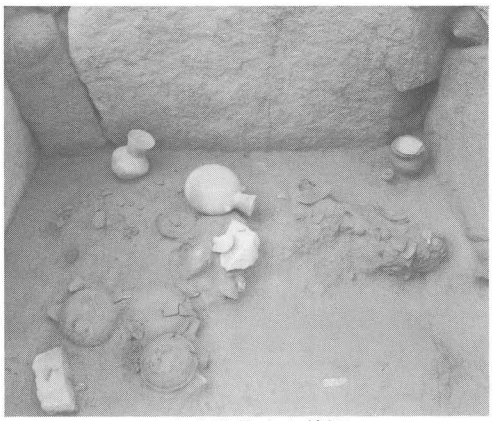


勾玉、切子玉、管玉

須恵器・土師器

西石ヶ谷５号墳　　西石ヶ谷４号墳の西５ｍに位置する直径９ｍの円墳（高さ不明）で、埋葬施設は右片袖の横穴式石室です。盗掘のため、羨道は破壊されていました。被葬者は２人以上と考えられます。４号墳と同様に須恵器坏を重ねた転用枕が出土しています。出土遺物には、土師器、須恵器の他、金環、ガラス玉、鉄鏃、刀子がみられ、築造時期は６世紀後半と推定されます。

５号墳石室

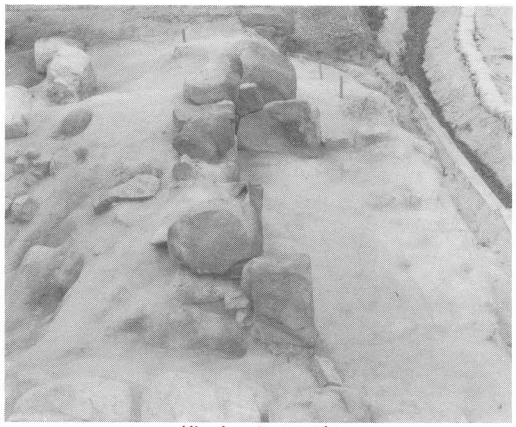


石室内遺物出土状況

須恵器、土師器

西石ヶ谷６号墳　　西石ヶ谷３号墳の東20mに位置する直径12m（高さ不明）の古墳で、埋葬施設は右片袖の横穴式石室でした。古墳は、道路によって東側半分を切断されていました。そのため遺物は、須恵器、鉄鏃、刀など少量出土したのみで、築造時期は、６世紀後半と推定されます。

６号墳全景


横穴式石室

横穴式石室

石室内遺物出土状況

まとめ　　西石ヶ谷支群は、舞子古墳群の中では、唯一完掘された古墳群です。６世紀中葉に４号墳が築造され、７世紀前半築造の２号墳まで約半世紀にわたって古墳築造が継起的に行われています。この傾向は他の支群でもみられ、舞子古墳群の形成の実態をこの西石ヶ谷支群の各古墳からうかがうことができます。

12. 松野（まつの）遺跡（昭和56年度）

所在地　神戸市長田区松野通４丁目
時代　弥生時代、古墳時代、鎌倉時代
種類　掘立柱建物、竪穴住居址、区画溝、柵列群、土壙

位置　松野遺跡は「市営松野住宅」の建設に伴う試掘調査によって発見されました。国鉄「新長田駅」の西方300mに位置しており、南北に伸びる微高地に立地しています。

検出された遺構の一部は、調査終了後埋め戻され、再び地下にねむっています。

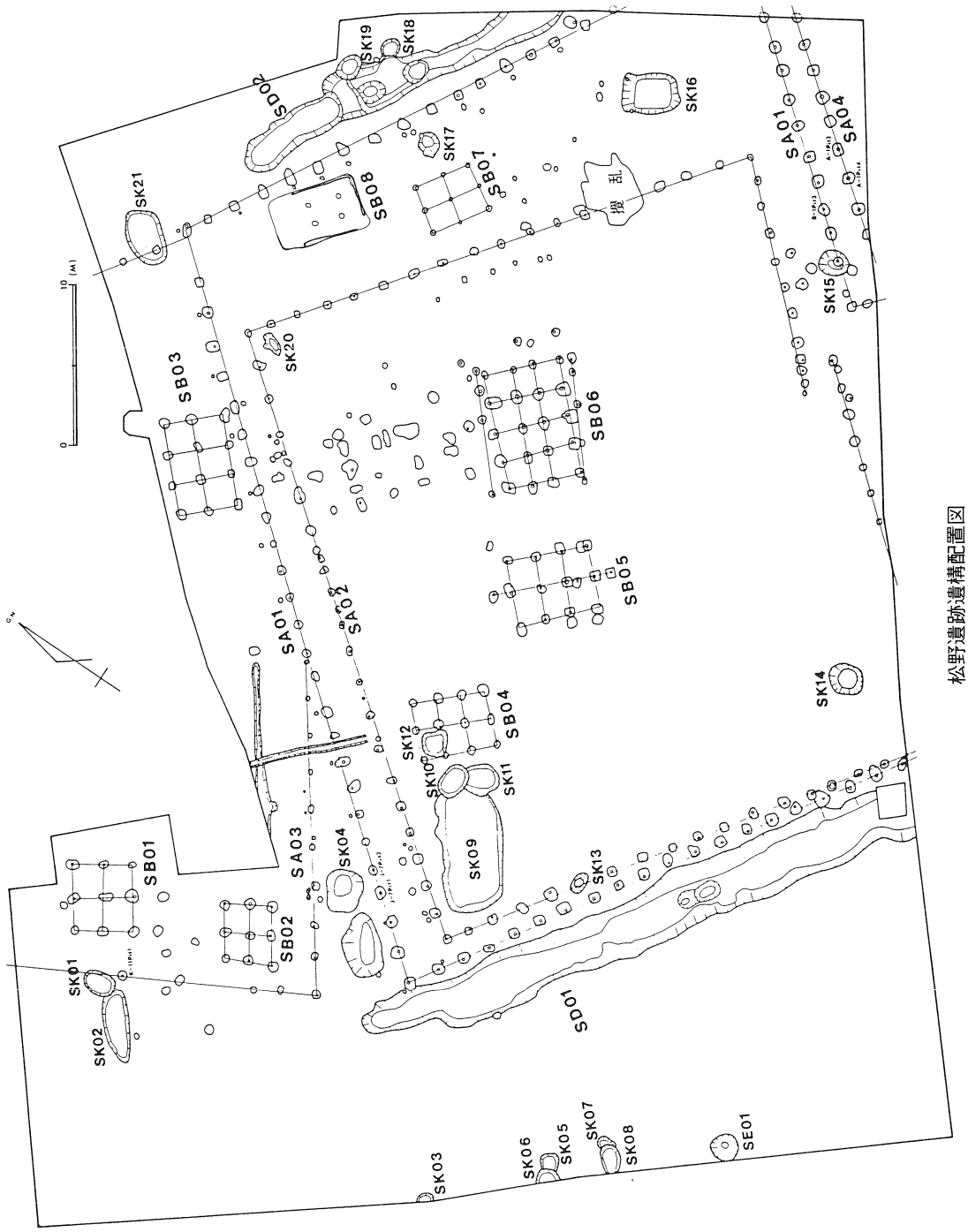
遺構　溝と柵列による長方形の区画の内に整然と配置された総柱の掘立柱建物７棟、竪穴住居址１棟が検出されました。さらに調査区北側にも掘立柱建物群がねむっていると予想されます。これらが建設された時期は、溝に投棄された土器群が６世紀初頭のものであることからその直前の５世紀末～６世紀初頭であったと考えられます。

この遺跡の特徴は、まず極めて計画的に建物が配置されていること、次に「棟持柱」や「入母屋屋根高床建築」と推定される当時の特殊な建築手法による建物が含まれていることがあげられます。

まとめ　これらの建物群が何の目的で建てられたのか興味ある点ですが、それは、国内の他の遺跡との比較検討を進めなければなりません。

しかし、この時代の柵、溝等で区画された掘立柱建物群の類例が極めて少ないことから、当時の最先端技術による特殊な建物群であったことがうかがえます。

こうした事実からも、この地域の歴史を考えていく上で重要な遺跡です。


SD02
SK19
SK18
SK21
SB08
SK17
SB07
SK16
撹乱
SA01
SA04
SK15
SB03
SK20
SB06
SB05
SA01
SA02
SK14
SK12
SB04
SK10
SK11
SA03
SK04
SK09
SK13
SB01
SB02
SK01
SK02
SD01
SK03
SK06
SK05
SK07
SK08
SE01
10 (M)
0
N

松野遺跡遺構配置図

遺 跡 全 景

須恵器、土師器

13. 神楽（かぐら）遺跡（昭和58年度）

所在地　神戸市長田区神楽町２丁目
時代　弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代中期
種類　住居址・溝・土壙

位置　新湊川（苅藻川）の下流西岸に位置しています。このあたりは、苅藻川、妙法寺川によって形成された扇状地で、標高約４ｍの低地に立地しています。

遺構・遺物　神楽遺跡は、昭和54年に神戸市高速鉄道（地下鉄）建設工事に先立つ遺跡確認調査で発見された遺跡です。この地下鉄工事に伴う発掘調査では、弥生時代後期の溝、平安時代中期の溝などが見つかり、平安時代の溝からは、須恵器、土師器、黒色土器のほか、緑釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶器が出土し、これらの土器のなかに「東福」と墨書されたものが数点ありました。

昭和58年度に保育所改築のため、地下鉄建設工事に伴う調査地の北側隣接地を発掘調査しました。この調査では、前回調査地から続く弥生時代後期の溝のほか、古墳時代後期の竪穴住居址５棟、溝２条、土壙、ピットが多く発見されました。また、平安時代の溝１条、ピット多数が検出されました。竪穴住居址は、いずれも方形で出土した須恵器、土師器から６世紀初頭の時期であることがわかりました。土壙からは、須恵器・土師器のほか製塩土器・獣骨に10数条の線刻をしたものや獣歯が出土しました。平安時代の溝は、幅４ｍ以上、深さ0.8ｍで、溝内から須恵器・土師器・黒色土器、緑釉陶器などの遺物が出土しました。

まとめ　神楽遺跡の調査は、２次にわたる調査を合わせても、わずか50ｍ四方あまりの範囲ですが、この地域は弥生時代から平安時代に至る原始古代の人々が生活を営んでいたことが明らかになってきました。

古墳時代の人々の一般的な住居址は、神楽遺跡に見られるように竪穴住居址で構成されています。ところが、当遺跡の西方約１㎞の松野遺跡では、同時期のものでありながら、溝と柵で囲まれた中に掘立柱建物群だけで構成されています。至近距離にありながらその構造に明確な差異がみられます。この差異がいったい何であるのか今後の研究課題として残っています。

14. 宇治川南遺跡（昭和57・58年度）

所　在　地　　神戸市中央区楠町１丁目
時　　代　　縄文時代早期～室町時代
種　　類　　墓址・住居址

位置・経過　　宇治川南遺跡は、大倉山の東麓を流れる宇治川によって運ばれた堆積土上に存在しています。市営住宅建設工事に先立って行った試掘調査の結果、縄文時代から室町時代にわたる複合遺跡であることが判明し、弥生時代前期から中期にかけての小型木棺墓群、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての平地式住居址群などが発見されました。

遺　構　　弥生時代の木棺墓・平地式住居址、古墳時代前期後半のＬ字状の溝、平安時代後期と考えられる柱穴・溝などが検出されました。古墳時代の溝中からは、土師器甕・壺・高坏などが、ほぼ完形で出土しました。

遺　物　　調査区の西側に位置する段丘の下や旧河道中から、縄文時代晩期、弥生時代前期の土器が多量に出土しました。これらの土器の出土範囲や出土層位が類似していることは、縄文時代から弥生時代への社会の変化を考える上で重要です。

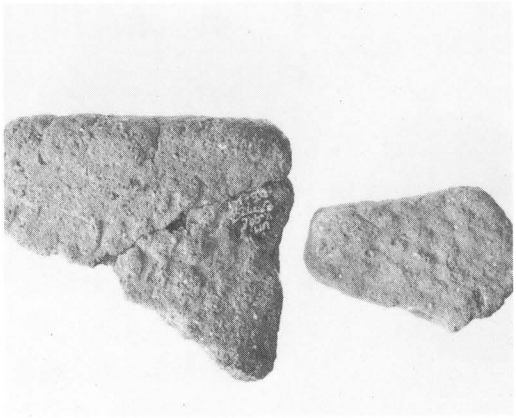
この他、縄文時代・弥生時代の多数の石器が発見されました。石器の種類は、石鏃・削器・楔形石器・石錐・石斧・石包丁などです。

特殊な遺物としては、石棒と土偶があり、ともに縄文時代晩期後半のものです。

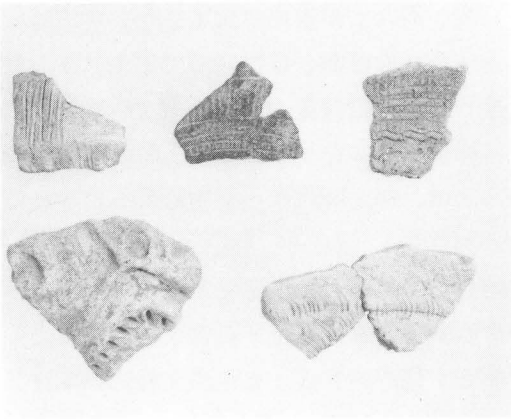
平安時代後期から鎌倉時代の遺物としては、10世紀末の黒色土器・灰釉陶器、12世紀後半～13世紀前半の瓦器・土師器・須恵器などが挙げられます。

まとめ　　宇治川南遺跡の重要性は、縄文時代から鎌倉時代まで永く連続して存在していることにあります。近畿地方では、縄文時代の遺跡の発見例は少なく、早期から晩期までの継続した土器は、貴重な資料です。縄文土器の中には、後期初頭の堀ノ内Ⅰ・Ⅱ式（関東地方）、晩期の大洞式（東北地方）土器が見られるほか、大分県姫島産と考えられる黒曜石が、晩期の土器に伴って出土しています。これらの資料から、当時の交流関係と文化の伝播がうかがわれます。また、平安時代後半の柱穴・溝などが検出されたことにより、当遺跡周辺が福原京の一部ではないかと考えられます。

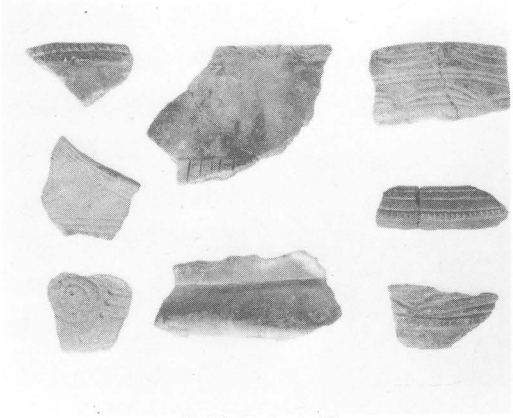
縄文土器出土状況



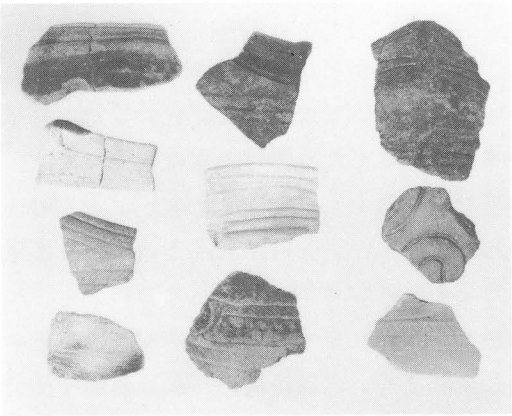
早期縄文土器



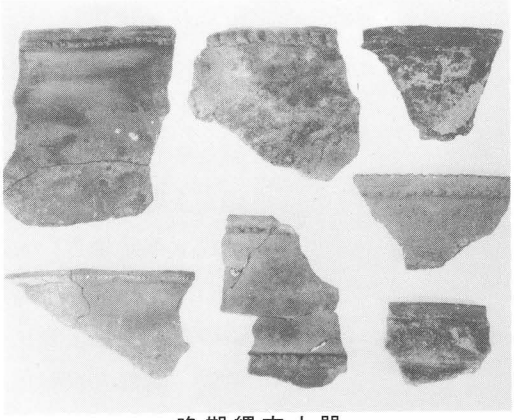
中期縄文土器



後期縄文土器

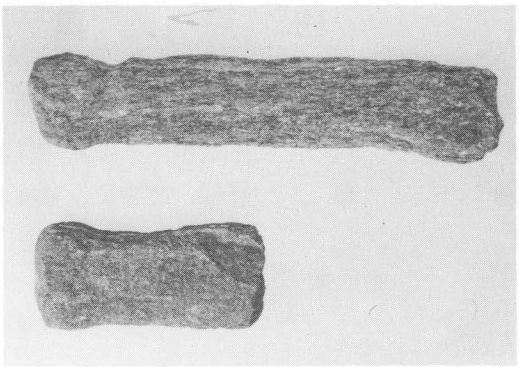


晩期縄文土器

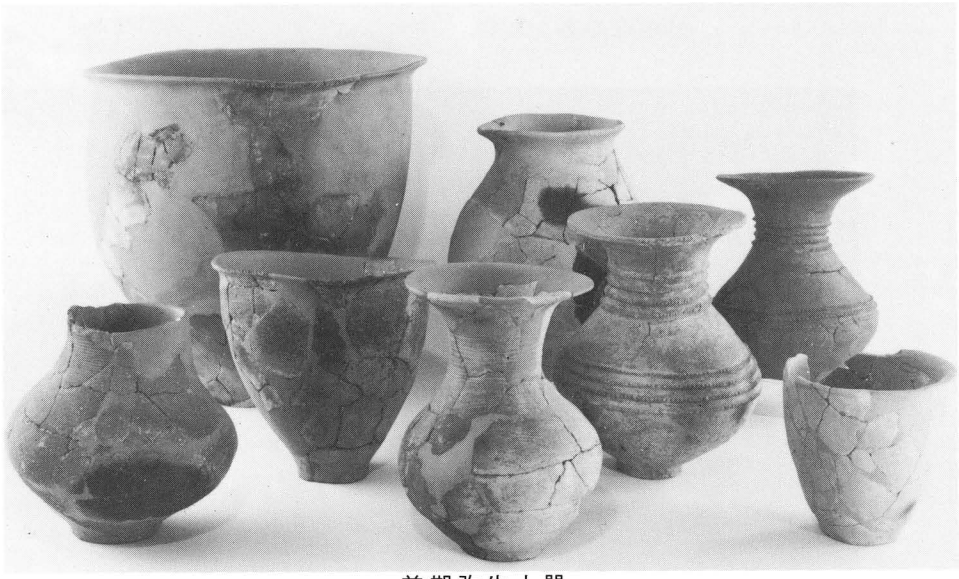


晩期縄文土器

土　偶



石　棒



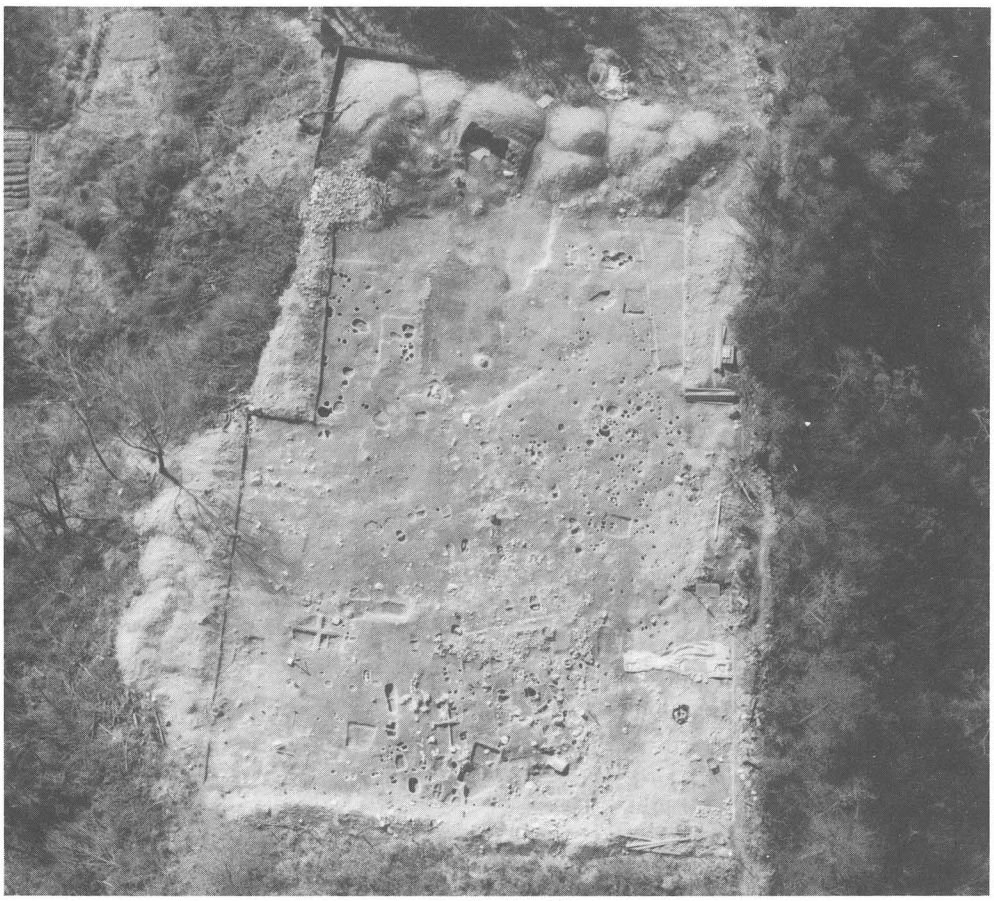
前期弥生土器

古墳時代土師器

15. 滝ノ奥遺跡

所　在　地　　神戸市灘区高羽字滝ノ奥
時　　代　　平安時代、鎌倉時代、室町時代
種　　類　　経塚、建物址、墓址

位　置　　滝ノ奥遺跡は、六甲山系から南方に派生する尾根の頂部（標高151m）に立地しています。同じ尾根の北方には、銅鐸14口、銅戈７口が出土した桜ケ丘遺跡が存在し、これらの出土品は国宝に指定されています。また南方には、弥生時代の高地性集落と考えられる桜ケ丘遺跡Ｂ地点があります。



遺跡全景

この遺跡は民間企業のマンション建設のため、昭和56年４月から９ケ月間、約1800㎡を対象に発掘調査を実施した結果、平安時代の経塚１基、掘立柱建物址２棟、鎌倉時代のものと考えられる火葬墓14基、礎石建物址１棟、土壙２基など多くの貴重な遺構を検出しました。

遺　構　　これらの検出された遺構の中で特筆されるのは経塚で、発掘調査で出土したのは、兵庫県下では田多地経塚（出石郡出石町田多地所在）に次ぐ２例目です。

経塚は、一般的に土又は石が盛り上げられていますが、この滝ノ奥遺跡の場合、後世の開墾により削平されていました。しかし、経典や埋納品を納めた石室等は殆んど残っていました。

規模は、裾石から復元すると、一辺約3.8mの方形又は台形のマウンドをもっていたと思われます。そのほぼ中央に、1.1m×1.4mの台形の穴を穿ち、そこに六甲山系で普遍的に存在する花崗石を使用し、経典を納めた経筒を入れる石室を構築していました。

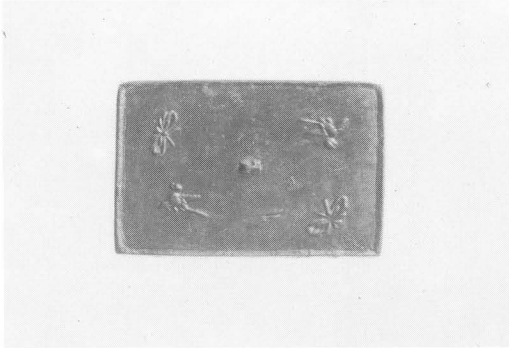
この経筒は、西区神出町などに所在する神出古窯址群の製品と考えられ、その中には、金銅製独鈷杵がありましたが、納められていたはずの経典は残っていませんでした。

経塚遺物出土状況

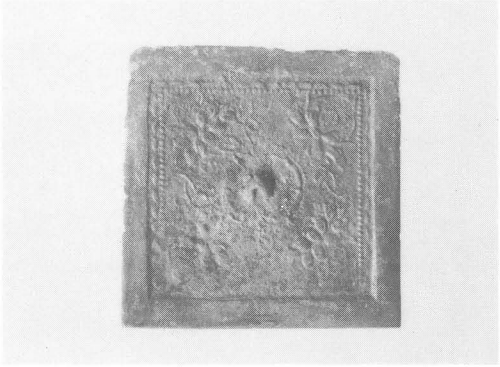
また石室掘り形からは、和鏡11、青白磁合子３、同壺形合子２、白磁壺形合子１、鉄製刀子８が、栗石内から崇寧重宝（北宋銭1103年初鋳）１、鍍金飾り金具１、白磁片が出土しています。

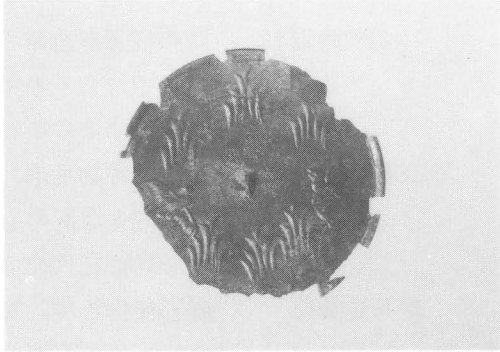
和鏡11面のうち３面は、和紙の残片が付着しており、和紙に包んで埋納されていたことが知られます。また２面には、「女清原氏」（山吹双鳥鏡）「平野女上□」（蝶鳥鏡）と針書されたものがあります。

経　筒



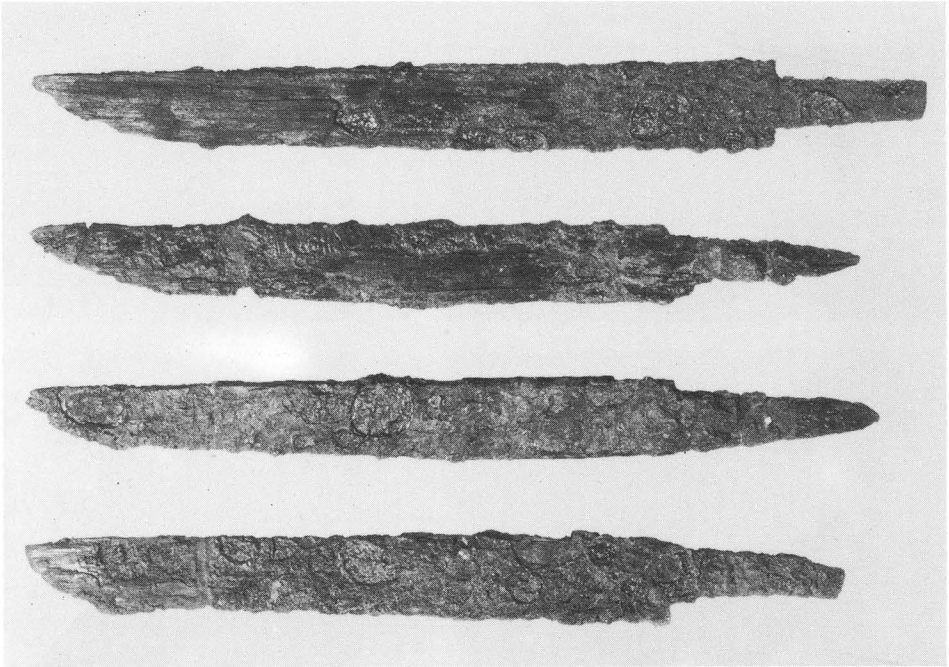
和　鏡





和　鏡

白磁、青白磁合子



鉄　刀　子

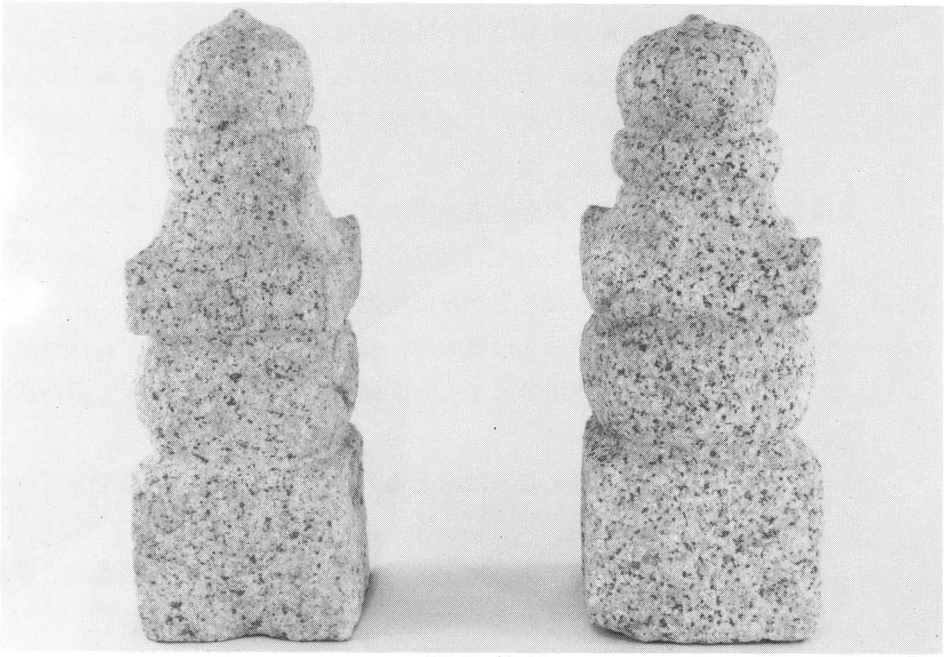
造営時期　この経塚が造営された時期は、崇寧重宝の初鋳年代、他の経塚出土の白磁壺形合子の年代、形態的に類似する経塚の年代を考慮して12世紀中葉とするのが妥当と考えられます。

掘立柱建物址　掘立柱建物址は、調査区北方基壇上遺構に１棟、調査区中央に１棟、共に３間×２間のものが検出されました。これらの建物址は、出土遺物から10世紀代のものと考えられます。

礎石建物址　礎石建物址は、北方の基壇上遺構に掘立柱建物址と重なるように存在していましたが、後世の削平により、その規模は不明です。この建物址の造営年代は、出土遺物から13世紀代と考えられます。

火　葬　墓　　火葬墓は、調査区中央を中心に、合計14基検出されました。形態的には、円形・方形・楕円形と様々ですが、楕円形が多いようです。これらの火葬墓からは、骨片、鉄釘の他に出土遺物がなく、時期は断定できませんが、後に述べる一石五輪塔と同じ時期（室町時代）と考えられます。

土　壙　　調査区南方の土壙（210×140cm）からは、ほぼ真北に向けて、一石五輪塔10基が出土しました。



一石五輪塔

遺　物　　出土遺物は、先土器時代の有茎尖頭器、弥生土器片、石鏃、平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、三彩系陶器片、灰釉陶器、緑釉陶器、古銭、鎌倉時代から室町時代の土師・須恵器、瓦器、中国陶器、瓦、鉄釘、五輪塔、石仏など、幅広い時代の数多くの遺物が出土しています。

ま　と　め　　出土遺物のうち、三彩系陶器片、灰釉陶器、緑釉陶器等は、平安京など都城、官衙、寺院等限られた遺跡から出土しますが、これらが発見されたことや、経塚、火葬墓、五輪塔を埋納した土壙が検出されたことから、10世紀代に建立された寺域の一部ではないかと考えられます。

16. 処女塚古墳（昭和54・56・57年度）

所在地　神戸市東灘区御影塚町４丁目10
時代　古墳時代前期
種類　前方後方墳

位置　阪神石屋川駅南西約１kmに位置し、石屋川によって形成された砂堆上に立地しています。

経過　大正11年に国の史跡指定を受け、市街地の公園として活用されてきましたが、墳丘の流失が著しくなったため、整備工事をおこなうことになりました。この工事に先立ち、昭和54、56、57年度に発掘調査を実施しました。

遺構・遺物　すでに原形は道路等によってかなり削平を受けていました。しかし、原形をとどめていた部分から復元すると、全長70m、後方部39m×40mであったことがほぼ推定されました。

前方部は２段築成で、葺石を施し、東側くびれ部付近に、箱式石棺１基が検出されました。棺上には、滑石製勾玉１個が置かれていました。

後方部の葺石はほとんど流失等によって原形をとどめていませんでした。

墳頂部には、推定長約13m、幅約２mの埋葬施設と予想される石組みが検出されました。

墳丘の大半は、盛土によって築かれていました。

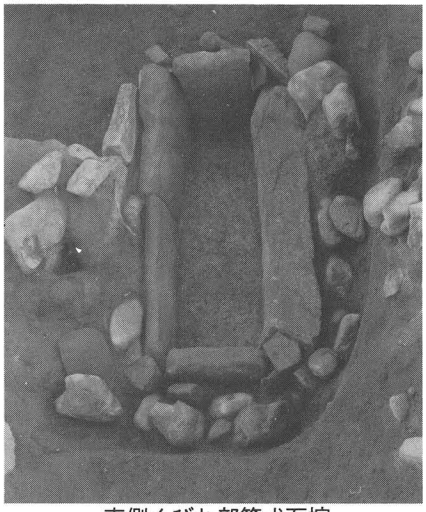
墳丘流土から、壺形埴輪片が検出されました。これは、竹の切り口を押しつけた特徴的な文様（竹管紋）で飾られています。

まとめ　３次に及ぶ調査によって、処女塚は、従来考えられていた前方後円墳ではなく、前方後方墳であり、ほぼ全体が盛土によって、ていねいに築かれていることがわかりました。

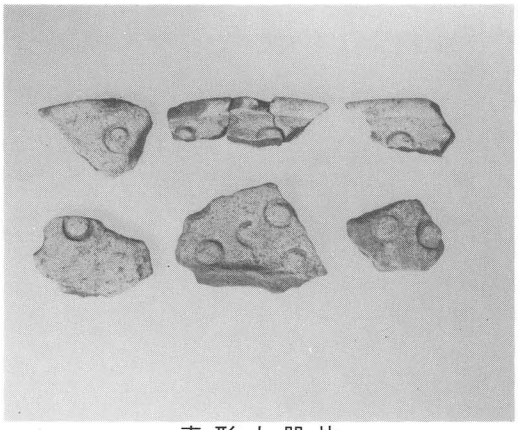
さらに築造時期も、出土遺物や、築造方法から、４世紀代に遡ることになりました。このことは、周辺の古墳群（東・西求女塚、ヘボソ塚等）を理解する上で貴重な発見となりました。

全　景

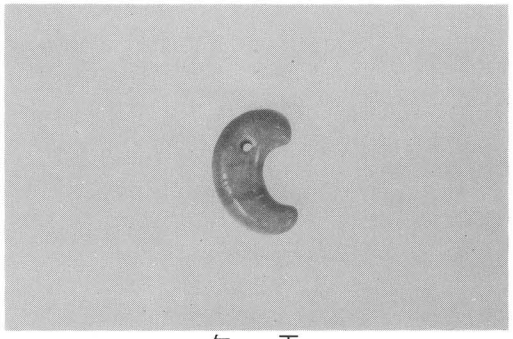
前方部東側根石列



東側くびれ部箱式石棺



壺形土器片



勾　玉

17. 郡家（ぐんげ）遺跡（昭和57年度～昭和59年度）

所　在　地　　神戸市東灘区御影町郡家・城の前
時　　代　　弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代～鎌倉時代
種　　類　　住居址・墓址

位　置　　郡家遺跡は神戸市東灘区御影町御影、郡家を中心に、東は住吉川、西は石屋川、北は阪急電車神戸線、南は国道２号線まで拡がるであろうと考えられる遺跡です。

調査は、昭和54年度の郡家大蔵地区で奈良時代掘立柱建物が発見されて以来、現在まで15回におよんでいます。最近では都市計画道路山手幹線、弓場線建設に伴って、城の前地区を中心に調査を行っています。この城の前地区では、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構、遺物、そして古墳時代、平安時代、鎌倉時代の集落址が発見され、弥生時代～鎌倉時代におよぶ複合遺跡です。

城の前地区天神川第１次調査（昭和57年度）

検出した遺構は弥生土器、須恵器が出土する自然河道３ヶ所、コの字形に屈折する弥生時代の溝などです。

出土遺物には弥生時代の溝の北側コーナー部で出土した壺形土器、甕形土器と60cm大の花崗岩の直下に埋納された形で出土した小形甕形土器などがあります。河川内からは、鉢形土器、甕形土器、高坏形土器、須恵器坏身などが多数出土しました。

出土した弥生土器は、弥生時代終末期のもので、六甲山南麓でのまとまった出土は少なく、土器の研究上重要であると考えられます。

城の前地区天神川第１次調査全景

後期弥生土器出土状況

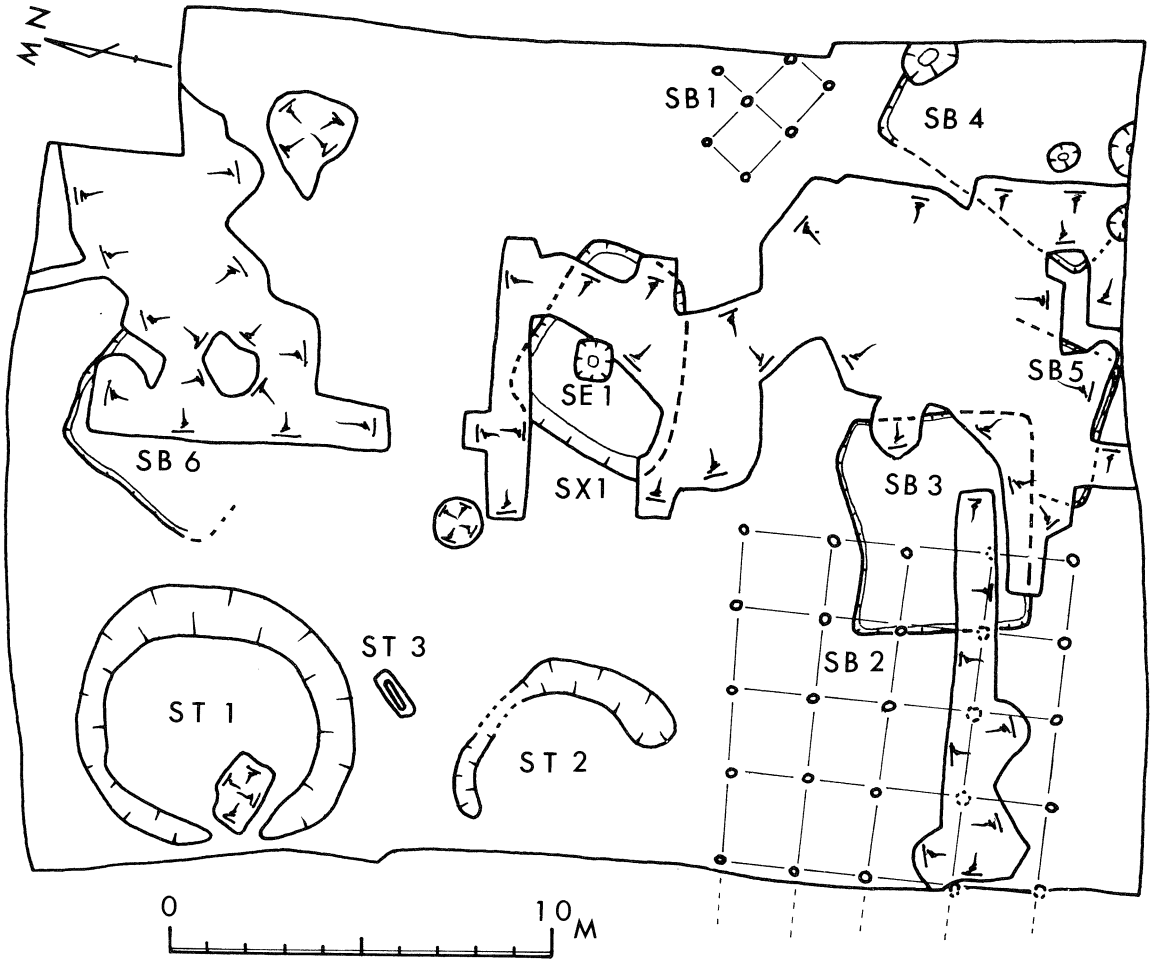
城の前地区第４次調査（昭和58年度）

弥生時代の円形周溝墓２基、土壙１基、古墳時代後期の住居址４棟平安時代後期掘立柱建物址１棟、鎌倉時代掘立柱建物址１棟、井戸１基、土壙を検出しました。

弥生時代　弥生時代の円形周溝墓２基は、埋葬主体部がすでに削平され、残っていませんでしたが、直径約７ｍ程の不連続な周溝は残っていました。また土壙は、5.5ｍ×３ｍの台形状のプランを持ち、内部からかなりの弥生土器及び炭化木が出土しましたが、その性格は不明です。

これら弥生時代遺構は、出土土器から、弥生時代後期と考えられます。

古墳時代　古墳時代の住居址は、撹乱のためその残存状況は悪く、正確な規模が明らかになったのは１棟のみでした。5.6ｍ×4.7ｍの方形プランで、



城の前地区第４次調査遺構図

他の住居址と同様の竪穴住居址です。またそのうち２棟から、滑石原石１点、及び滑石製紡錘車１点が出土しましたが、未製品やチップ（小剝片）などは出土せず、玉作工房址とは考えられません。

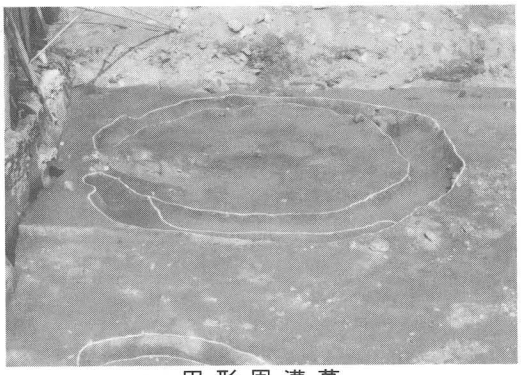
これら古墳時代の遺構は、出土土器から、６世紀初頭と考えられます。

平安時代　調査区域内で確認された平安時代後期の掘立柱建物址の規模は、４間×４間で、西方の調査区域外に延びる可能性が十分あります。建物は総柱で、柱穴掘り形の径は、約40～50cmを測ります。

鎌倉時代　鎌倉時代の井戸は、一辺１mの方形プランを持ち、深さは、1.3mを測ります。底部は、径30cm程の円形で、径15～30cm程の礫を積み上げていました。

掘立柱建物址は、撹乱や調査区域の問題で、規模は明確にできませんでしたが、東西方向２間分は確認できました。

城の前地区第４次調査全景


円形周溝墓

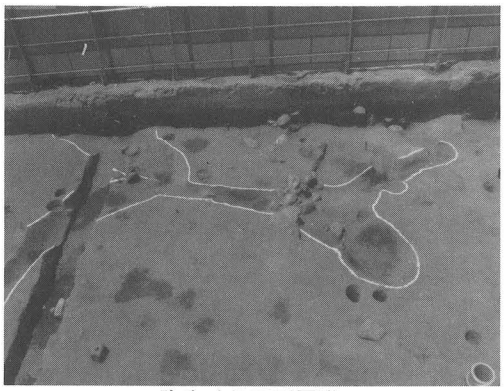
城の前地区第６次調査（昭和59年度）

弥生時代　円形周溝状遺構２条と土壙２基を検出しました。円形周溝状遺構の一方は、２つの円形周溝状遺構が、溝の一辺を共有するような形をしています。溝の深くなった部分から、丹塗りの小形壺が完形で出土しました。土壙からは、Ｖ様式の壺、甕、鉢がまとまって発見されました。

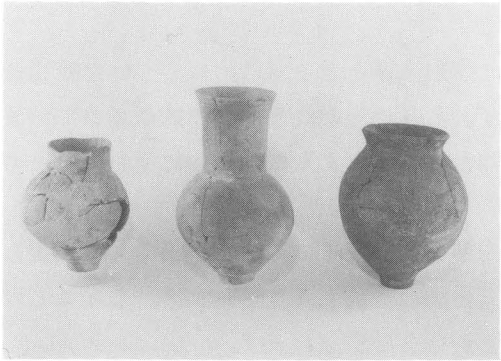
古墳時代　方形竪穴住居址２棟、溝２条、土壙、ピットなどが検出されました。住居址の一方は、残存状態が良好で、半分は調査区域外にありますが一対の柱穴が見つかりました。この住居址を切る溝からは、有孔円板が出土しています。住居址内からは、５世紀後半の須恵器坏、高坏が出土していま

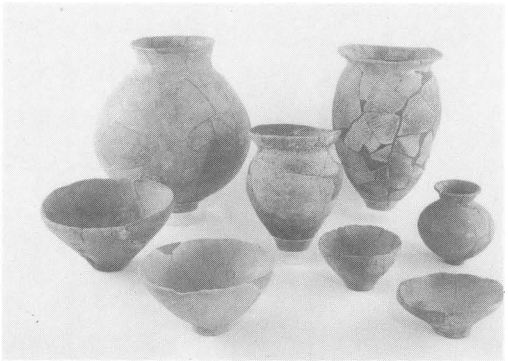
平安時代　平安時代の遺構としては、土壙、ピット、溝があります。土壙の一つからは土師器の皿と共に、北宋銭「宋通元寳」が出土しています。ピットは多数検出されましたが、建物になるものは、見つかりませんでした。

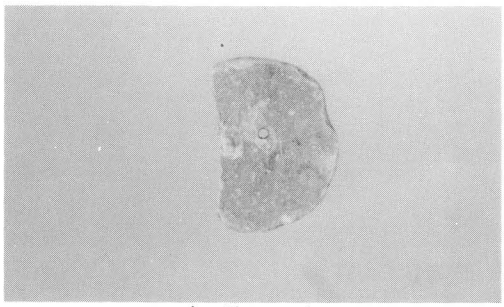
まとめ　調査の結果「菟原郡衙」を裏付ける時期の遺構は発見できませんでしたが、4時代にわたっての遺構が検出され、特に円形周溝墓は、神戸市内で最初の発見例であり、近接地域（城の前1次地点）で発見された方形周溝状遺構と共に、弥生時代の墓制を解明する貴重な資料といえます。

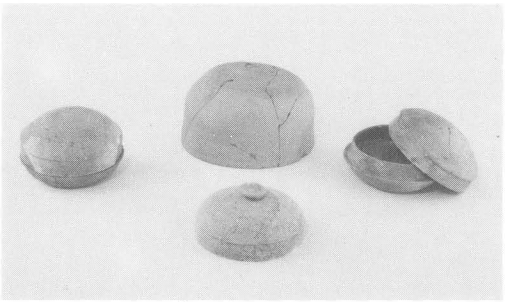

弥生時代円形周溝

古墳時代住居址


後期弥生土器


終末期弥生土器


有孔円板


古墳時代須恵器

18. 森北町遺跡（昭和57年度）

所　在　地　　神戸市東灘区森北町４丁目
時　　代　　弥生時代中期・鎌倉時代
種　　類　　溝

位　置　　森北町遺跡は芦屋川の右岸にあり、弥生時代後期前半の高地性集落遺跡である会下山遺跡の所在する丘陵端にひろがる遺跡です。

昭和39年に森北町23番地で多量の土器片がみつかり、その存在が知られました。遺跡は森稲荷神社を中心にして東西300m、南北250mの範囲にひろがっていると推定されています。

遺構・遺物　　今回の調査でみつかった遺構は、鎌倉時代の溝１条、弥生時代の方形周溝状遺構６ヶ所です。

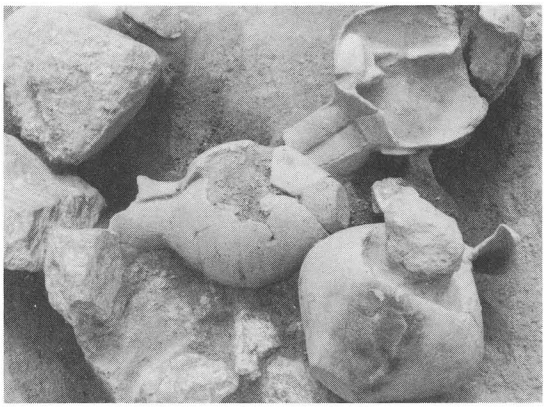
鎌倉時代の溝は、断面形がロート状で溝幅は約2.5m、深さ1.5mの規模で、溝内から平安時代末期～鎌倉時代にかけての土師器皿、瓦器椀、陶磁器類が多量に出土しました。

弥生時代の溝は、幅1.1m～1.7m、深さ30cm～40cmのＵ字溝で、屈折する部分で、壺形土器５点、器台形土器１点が出土しました。

鎌倉時代の土器は、日常用いた雑器類で、特に瓦器は六甲南麓ではめずらしい古い型式のものです。

弥生土器は非常に飾られた壺形土器と水差形に片口のついた細頸壺などがあり、底部には、いずれも孔が穿たれて非実用的にされていました。このことは伴出した器台形土器とともに祭礼用に使われたと考えられます。

ま　と　め　　弥生時代の溝はＬ字形に曲がり、コーナーに土器が集中して出土していることから、方形周溝墓の溝の一部と考えられます。このことは出土土器が祭礼用であることからも推察されます。



▲　中期弥生土器
◀　弥生土器出土状況

19. 山田小学校内遺跡（昭和58、59年度）

やまだしょうがっこうない

所　在　地　　神戸市北区山田町中
時　　代　　平安時代～室町時代
種　　類　　竪穴住居址、掘立柱建物跡、土壙、墓址、石敷遺構

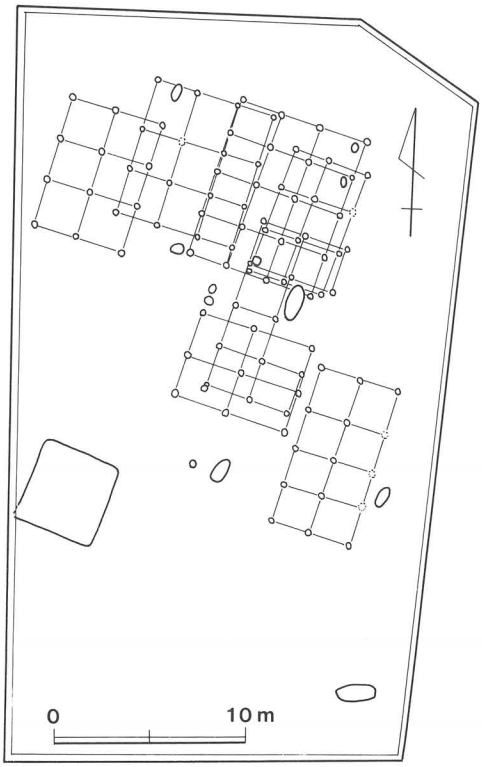
位　置　　山田小学校内遺跡は、六甲山地と帝釈山地を水源として東から西へと流れる山田川の南河岸段丘上に立地しています。

経　過　　山田小学校の校舎建て替えに伴い、事前に試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認されたため、昭和58年に校舎部分の約800㎡について第１次調査を、昭和59年に運動場部分の約870㎡について第２次調査を実施しました。

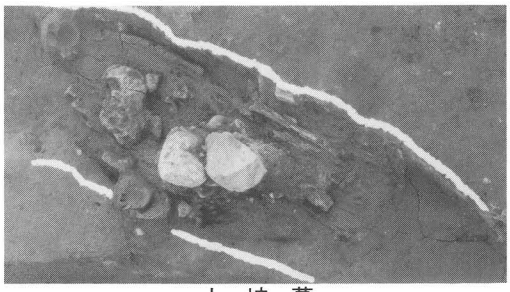
遺　構　　発掘調査で検出された遺構は、７世紀中頃の竪穴住居址１棟、平安時代末期～鎌倉時代の掘立柱建物跡９棟、土壙墓２基、溝３条、土壙10ヶ所、焼土壙１ヶ所、石敷遺構２ヶ所などです。掘立柱建物跡は、いずれも総柱の建物で、２間×２間のものが２棟、３間×２間のものが２棟、３間×３間のものが１棟、４間×２間のものが３棟、４間×３間のものが１棟確認されました。土壙墓１基は、南北2.1m、東西0.9m、深さ0.3mを測る楕円形の遺構で、南端から歯が検出されており、埋土から白磁碗１点、土師器小皿２点、鉄塊１点などが出土しています。土壙墓２基は南北1.7m以上、東西0.5m、深さ0.1m以上を測る長方形の遺構で、墓壙内には頭蓋骨や足の骨などの人骨が、かなり良好な状態で残っていました。人骨は、幅0.3m、長さ1.0m以上の底板の上に頭を北向きにして埋葬されており、胸のあたりに上からこぶし大よりやや大きめの礫が２つ置かれていました。墓壙内より土師器小皿３点、須恵器埦の破片１点などが出土しています。

遺　物　　出土した遺物は、ほとんどが平安時代末期～室町時代（12世紀～14世紀）のものが中心です。最も多いのは須恵器で埦、皿、鉢、甕などがあります。その他に土師器の皿、堝、羽釜、甕や青磁碗、白磁碗、青白磁合子などの磁器や瓦器埦などもあります。

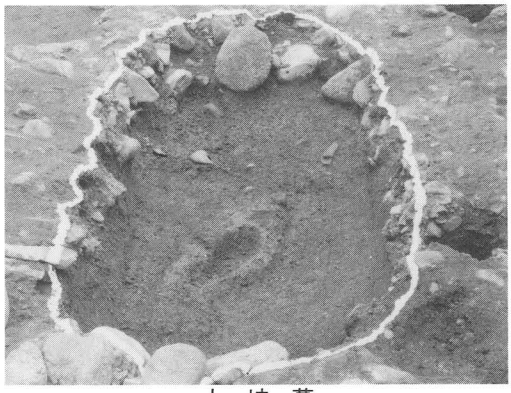
ま と め　　北を帝釈山地、南を六甲山地という二つの自然の要害に囲まれた山田地区は、古くから西国街道の裏街道として、淡河道とともに東西を結ぶ交通上の要所でもありました。中世にはこの付近に〝山田荘〟という荘園が置かれたことが知られており、山田川の谷筋に沿って古代、中世の寺社や石造物が残っています。今回の調査によって、当地域で中世の建物址や墓址が発見されたことは、意義深いことといえます。



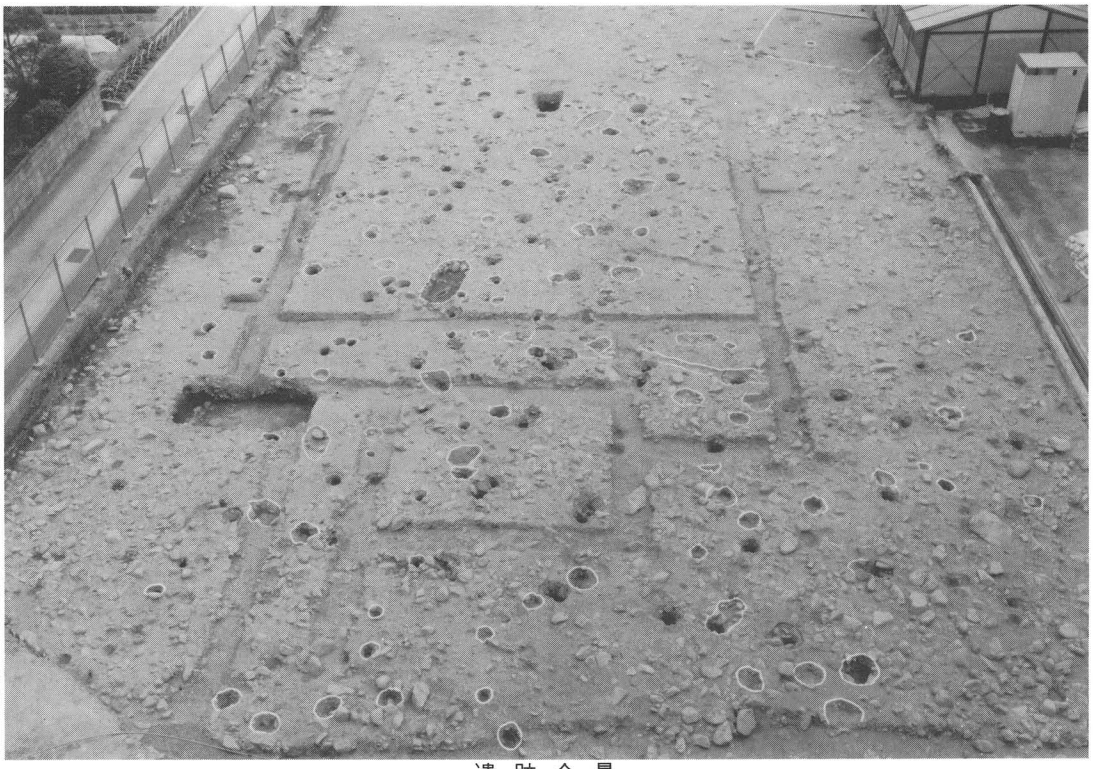
遺構配置図



土 坑 墓



土 坑 墓



遺 跡 全 景

20. オキダ古墳群（昭和57年度）

所　在　地　　神戸市北区道場町日下部
時　　代　　古墳時代後期
種　　類　　古墳（横穴式石室）

位　置　　オキダ古墳群は有野川左岸の河岸段丘上及び丘陵腹に５基程度が群在する古墳群です。今回、調査を行った古墳はオキダ１号墳と近接して河岸段丘上に存在するオキダ２号墳です。

横穴式石室　　古く田畑として開墾されていたため、天井石、側壁上部が失われていました。石室の掘形は長軸10m以上、短軸3.5mで、右片袖状になっています。石室の側壁は破砕されたり抜き取られて、もとの位置を保つものはありませんでしたが、奥壁は中央下段の１石がもとの位置を保っていました。

石室の規模は全長８m、玄室長5.4m、幅1.8m、羨道幅は玄門で1.0m、羨門で0.8mを測る右片袖式の横穴式石室です。

玄室の床面には、径20cm大の扁平な河原石を敷きつめ埋葬した後、そのうえから５cm大の栗石を敷いていたものと思われます。羨道床面には敷石がされた痕跡はみられませんでした。

遺　物　　床面での遺物の出土状態は、奥壁隅に須恵器坏身、台付長頸壺、鉄鏃、鉄釘、鉄刀子片、ミニチュア土器がありました。左側壁に沿って直刀３口、刀子、鉄鏃、右側壁中央に、馬具鍍金飾金具、素環鏡板付轡、床面中央には、須恵器坏蓋、土師器高坏、須恵器高坏、金環、羨門部では、無蓋高坏、甕形土器がこわされた状態で出土しました。

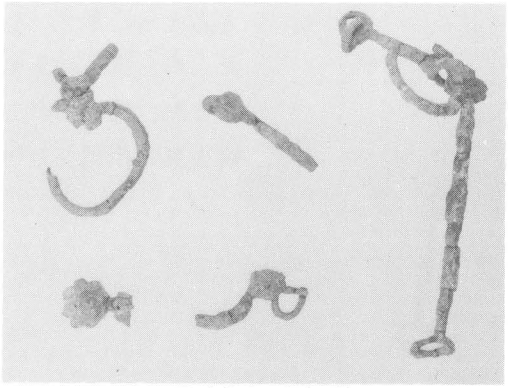
ま　と　め　　横穴式石室の使用時期は、長脚二段無蓋高坏の時期（６世紀中葉）から奥壁出土の有蓋台付長頸壺の蓋の時期（７世紀初頭）までの期間と考えられます。その間、床面の敷石は１度以上改修され、使用されたものと思われます。

また、馬具の出土は北神地区では初めてのものであり、鍍金された飾金具は相当有力な豪族の墓であったことを示しています。

オキダ１号墳遠景

オキダ２号墳石室内敷石

２号墳出土　須恵器



２号墳出土　馬　具

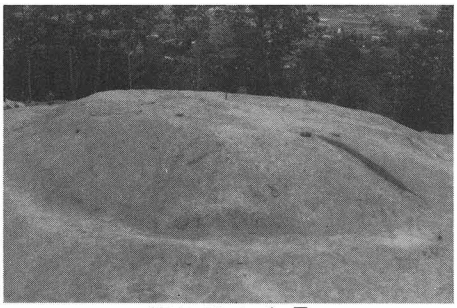
21. 北神第10地点遺跡（昭和56年度）

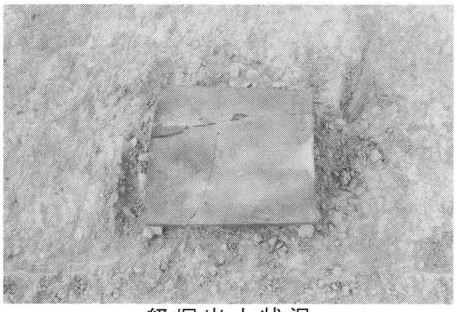
所　在　地　　神戸市北区道場町日下部
時　　代　　古墳時代・近世
種　　類　　礫石経塚、古墳

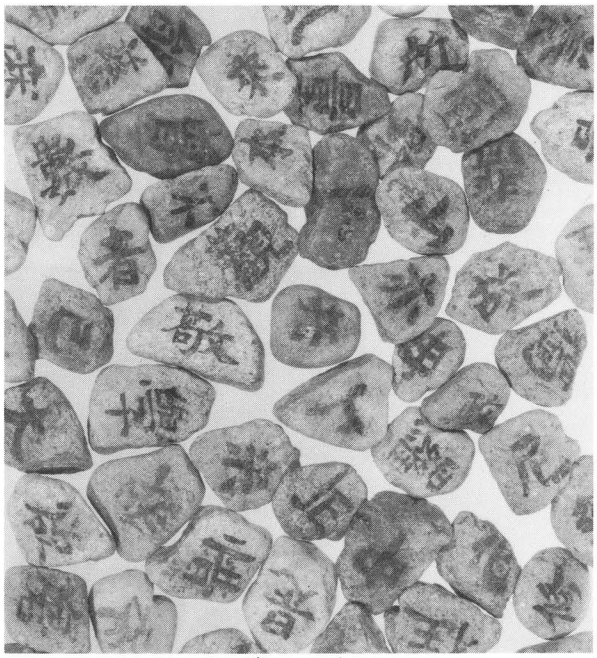
位　置　　北神ニュータウン（北神戸第１地区）予定地内の遺跡で、有馬川と長尾川の合流する平地を臨む、標高約210ｍの尾根頂部に位置しています。

遺構・遺物　　この遺跡は、分布調査により古墳と推定されていました。発掘調査によって墳丘の裾に、周溝を築いていることがわかりましたが、墳頂部は、すでに流失していたと思われ、古墳の埋葬施設は見つかりませんでした。また、遺物は古墳時代の須恵器片が、わずかに出土したのみでした。

この古墳の墳丘を利用して、頂部平坦面に近世の礫石経塚が築かれていました。礫石経塚は、径１～２㎝程の小円礫に一石につき一字を写経している一字一石経といわれるものです。その構造は、30㎝四方、深さ25㎝以上の掘形を掘り、底に平瓦一枚を敷き、礫石経を納めたのち、上部に平瓦で蓋をしていました。地上に、目印となる石などが置かれていた痕跡は認められませんでした。


第10地点全景


経塚出土状況


礫石経

22. 下宅原遺跡（昭和58年度）

所　在　地　　神戸市北区長尾町宅原
時　　代　　弥生時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代
種　　類　　竪穴住居址、掘立柱建物、土壙、溝

立　地　　武庫川がその支流である長尾川、八多川、有野川と合流する地点に間近いところで、南から北に向って派生する丘陵先端の低位段丘上および、その裾に広がる沖積地上に位置しています。

付近の丘陵上には、弥生時代中期末から室町時代にわたる数多くの遺跡が知られています。特に三田市境に連なる丘陵上および、周辺には数多くの横穴式石室が知られています。

遺　構　　低位段丘上（以下辻垣内地区と呼ぶ）には、弥生時代後期のピット、古墳時代前期の竪穴住居址２棟、同時代後期の竪穴住居址３棟、掘立柱建物址２棟、平安時代中期の掘立柱建物址１棟、平安時代末から鎌倉時代前期にかけての掘立柱建物址11棟、溝１条、土壙３基等がありました。

この中で特に記すべきものとして、古墳時代前期の竪穴住居址に造り付けの「カマド」のあったこと、古墳時代後期の竪穴住居址内で、「鍛冶」の行なわれていたことなどがあげられます。

沖積地上（以下大前地区と呼ぶ）には、古墳時代前期の溝１条、平安時代末から鎌倉時代前期にかけての掘立柱建物址３棟、小礫や木の枝を敷きつめた大きな落ち込み２基等がありました。

大前地区は、地盤が軟弱であるため、掘立柱建物を建てる際に整地をしていますが、その土の中に多量の古墳時代後期の土器が入っていて、それらのうちのいくつかは辻垣内地区の竪穴住居址内から出土したものと接合することができました。このことは、すでに平安時代の終わり頃に古墳時代の住居址の一部を壊わして土取りをしたことを示しています。

遺　物　　弥生時代のものは少なく、甕が１点出土しただけでした。古墳時代の前期では、住居址内から多量の小型の壺や甕が出土しています。また後期の住居址内からは、須恵器、土師器の他、鍛冶を行った際に出る「鉄滓」とよばれるものが出土しています。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺物の量は、遺構の数に比べて少ないですが、須恵器には、明石市の魚住古窯址や西区の神出古窯址、三田市の見比古窯址などで生産されたものがあります。また、中国で

生産された青磁、白磁、青白磁なども多く出土しています。特に珍らしいものとしては、土壙内から昆虫や木の葉がそのままの形で多量に見つかっていることです。これは、水分の多い土壙の底に粘土で密封されていたために今日まで保存されていたようです。

まとめ

下宅原遺跡に住んでいた古墳時代の人々は、周辺に数多く存在する古墳を造営した人々の一部であろうと考えられます。また、平安時代には当地域に、「家原荘」と呼ばれる荘園があり、掘立柱建物群に住んだ人々は、それに深いかかわりを持つ人々であった考えられます。特に、5間×6間という大規模な建物は、その用途とともに造営者の性格に注目されます。

辻垣内地区竪穴住居址

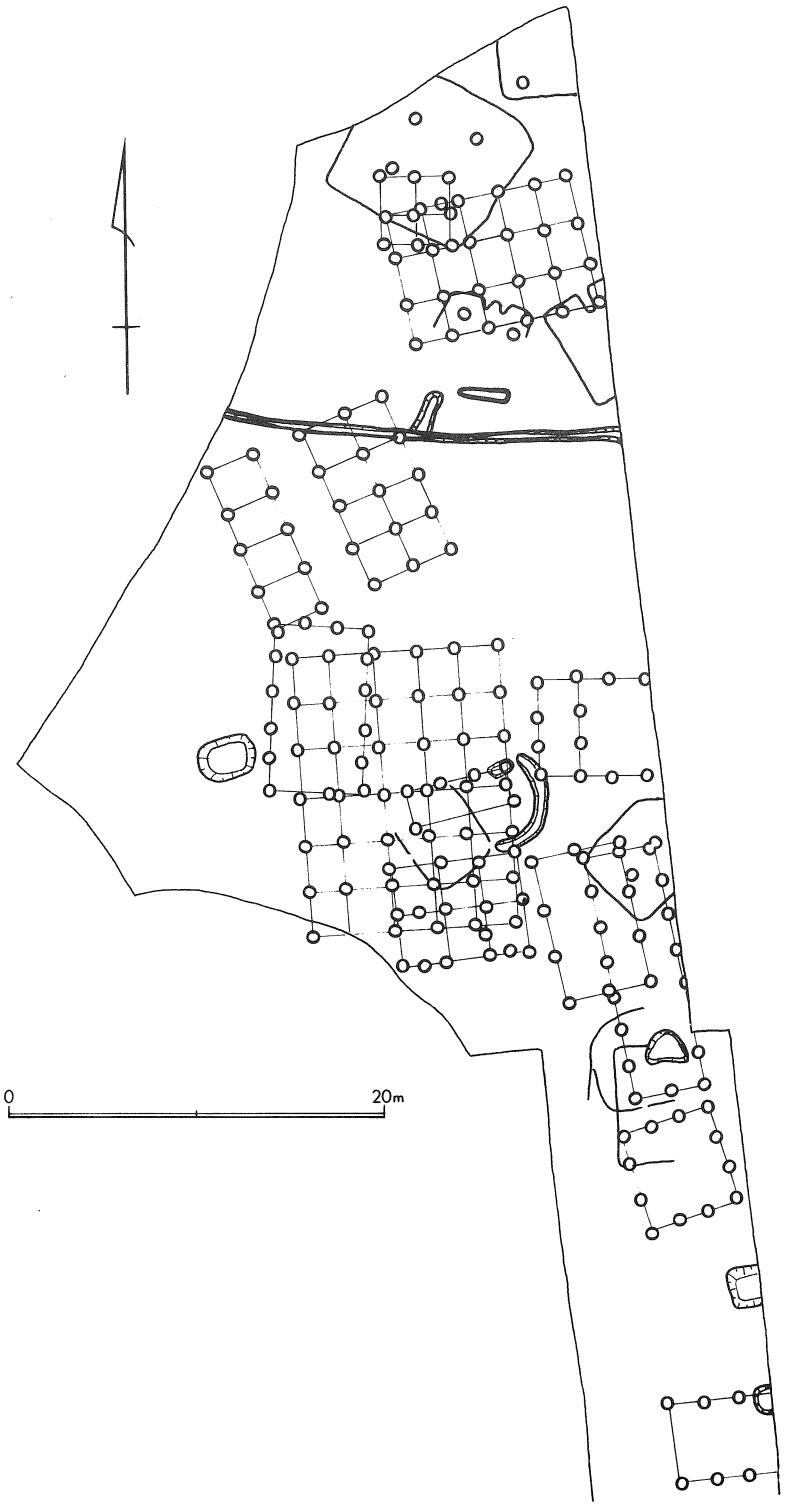
番号	規模	時期	備考
SB01	4.6 × 5.0m	布留併行	2本柱か？
SB02	4.5 × ？m	〃	カマド付
SB03	4.0以上 × 3.3m以上	Ⅱ－2	
SB04	7.8 × 8.0m	Ⅱ－3～4	2度建て替え
SB05	5.9 × 3.5m以上	Ⅱ－4	カマド付

辻垣内地区掘立柱建物址

番号	規模	時期	備考
SB06	7間×2間(13.1m×3.7m)	6世紀末	
SB07	3 ×2 (7.7× 4.5)	6末～7初	
SB08	3 ×1 (5.4× 1.8)	10世紀	
SB09	5 ×3 (9.8× 6.7)	12末～13初	総柱
SB10	2 ×2 (3.5× 3.5)	〃	〃
SB11	4 ×2 (9.0× 4.5)	〃	〃
SB12	4 ×1 (9.1× 2.7)	〃	
SB13	5 ×3 (8.7× 4.9)	〃	
SB14	6 ×5 (14.7×10.8)	〃	総柱
SB15	3 ×2 (6.6× 5.3)	〃	〃
SB16	3 ×3 (5.3× 4.1)	〃	
SB17	3 ×3 (5.3× 4.2)	〃	
SB18	4以上×3 (7.1以上×4.2)	〃	
SB19	2 ×1 (3.0× 1.8)	〃	

大前地区掘立柱建物址

番号	規模	時期	備考
SB01	5間×5間(13.0m×10.0m)	12末～13初	総柱
SB02	4 ×2 (8.8× 4.4)	〃	〃
SB03	4 ×3以上(9.0×6.8以上)	〃	〃



下宅原遺跡辻垣内地区遺構図

下宅原遺跡辻垣内地区全景

古墳時代須恵器、土師器

あとがき

ここに掲載しました遺跡は約30ヶ所ですが、ここ4年間に調査された遺跡は、100ヶ所以上にのぼります。それらすべてが、過去の人々の生活の証であり、神戸の歴史の一端を物語る資料ですから、一堂に集め展示すべきだったのですが、企画した私たち自身が毎日発掘調査に追われ、未だに泥にまみれたままの土器さえあります。このことは、私たちの努力不足にもよりますが、今後とも今回のような展示を目ざし、努力を続けてまいりたいと考えております。

不行き届きの多い展示ではありますが、少しでも皆様方のお役に立てば幸いに存じます。

今回の展示に際して、兵庫県教育委員会社会教育文化財課調査係　櫃本誠一、山本三郎両氏のお世話になりました。

地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ

昭和59年11月10日

編集　神戸市教育委員会
　　神戸市中央区加納町6丁目5番1号
発行　神戸市健康教育公社
　　神戸市兵庫区中之島2丁目1番7号
印刷　大和出版印刷株式会社
　　神戸市東灘区魚崎浜町27-21